



英靈性奴化 徹底陵辱

ギルガメッシュ・オジマンディアス編

FGO Unofficial fanbook
ギルガメッシュ & オジマンディアス総受け



英靈性奴化 徹底陵辱

ギルガメッシュ・オジマンディアス編

FGO Unofficial fanbook
ギルガメッシュ & オジマンディアス総受け

英靈性奴化徹底陵辱

ギルガメッシュ・オジマンディアス編

みたいわ南国



この本は、個人製作、非公式のファンブックです。
原作者様・出版社様とは一切関係ありません。

二次創作をご存じない一般の方や、

関係者様の目に触れぬようご配慮をお願いします。

また、十八歳未満の方の閲覧は固くお断り致します。

英靈性奴化徹底陵辱

ギルガメッシュ・オジマンディアス編

召喚陣が薄青く輝く。

眩い光のなか、英霊の座から喚び出されたふたりの王が、悠然とそこへ降り立った。装いは異なれど、その在り方にはいくつかの共通項もある。人民を統べる智、気高き眼差し、そして、誰もがはっと見惚れてしまうような美貌。キャスター・ギルガメッシュと、ライダー・オジマンディアスは、視線だけで挨拶を交わすと、眼前の、人理を守る役割を担った男を見据えた。

「……ふん」

「はは」

王たちの出現に喜びを隠せないでいるカルデアの主を認め、ふたりは当然、とでもいった風に鼻で笑ってみせる。よく来てくれた、よろしくとマスターが声をかけているところへ、一人の少女、マッシュ・キリエライトが駆け寄ってきた。

「ギルガメッシュ王、オジマンディアス王！ 召喚に応じていただき、感謝いたします。小さなものではありませんが、専用のお部屋を用意しております。私をご案内しましょう！」

「そうか」

「ふむ」

マスターへ一礼すると、マッシュはふたりを連れて廊下に出た。簡単にカルデアの現状を説明しながら、目的の場所へと向かっていく。

「この奥が、ギルガメッシュ王とオジマンディアス王のお部屋

になります。……また、戦いのさなかではありますが、お二人が来てくださったことを祝って、明日は宴を催す予定になっています。是非ご参加いただければ」と

「ほほう。雑種の分際で、なかなかの憎い心遣いではないか」「フアラオたる余の来訪を祝うという方が酷な話であるう。良い、赦す。存分にもてなすがいい」

「はい、楽しみになさってください！ このあと、ダ・ヴィンチちゃんより諸々の詳細がお伝えできると思いますので、お二人はお部屋で待機なさってくださいね。では私は、これで」

にこやかに笑みを浮かべ立ち去るマッシュの後ろ姿を、ギルガメッシュはじいっと見つめていた。その様子に、オジマンディアスが首を傾げる。

「……………」

「？ どうかしたのか、黄金の」

「いやなに。マッシュ……、とか言ったか、あの娘。以前にも会った記憶があるのだが、少々印象が変わったように見えてな」「ははは！ 年頃のおなごとは、まことに面白きものよな。おおかた、恋のひとつでもしたのだろうよ。思うさま謳歌すればよいではないか！」

不審げに目を細めていた賢王を、太陽王が笑い飛ばす。豪快な声が響くだけで、どことなく周辺の空気が和らいだ。靈基に

感じる懐かしさは、どこか異なる次元、世界線、特異点においても彼と親しかったことを示すのだろうか。

しかし皮肉なことに、この、旧友に出会えたという感情のゆるみが、ギルガメッシュの判断を誤らせてしまった。

「……そうさな。我が気にすることでもなしか」

本当はこのとき、気付いておくべきだったのだ。人類にとつて限りなく善であったはずの、カルデアという組織の変わり果てた姿に。このあと彼らが一步でも部屋の外に出ていれば、廊下でも職員用の便所でも、特定のサーヴァントたちがどんな扱いを受けているのか目撃しさえすれば、事態の切迫度が理解できていただろうに。

もっとも、仮に気付けたところで、どうにかなったものでもないのかもしれないが。施設の最奥で嚴重に保管されている聖杯、その意志は、およそ人智の及ばぬところにある。

あからさまな異変は、翌日に起きた。

カルデア内、マスターのマイルーム前に、異様な列ができあがっていたのだ。

閉じられたままの扉の向かいには、ずらりと男性サーヴァントたちが並んでいる。

それだけならなんの問題もないのだが、整列しているサーヴァントたちはみな、それぞれ苦悶や恥辱に顔を歪め、なにかに耐えるような表情でそこに立っていた。

原因は明らかで、彼らは全員、下半身だけを露出した状態でそこに直立していたのである。

普段は日に当たることもない股間の素肌の色まで曝して、細いもの、長いもの、太いもの、小さいもの、さまざまな外見の陰茎がずらりと数十人分横一列に並ぶ絵面は強烈な凄まじさがあった。拳を握り屈辱に震えればふるる、と男のシンボルが揺れ、無残な光景にむしろ滑稽さを足してしまっている。

鎧など取り外しのきかない装束は靈基を操作することにより腹から下部分だけが不自然に消え、衣服の範疇に入りそうな下衣についてはサーヴァント本人の手によつてずり下ろされ、足首やかかとの辺りでくしゃくしゃに丸まっていた。

人類史に残るほどの英雄たちが揃いも揃って、局部を丸出しにした間抜けな格好で、部屋の前に突っ立っている。

異常な状況にも関わらず、誰一人口を開く者はいなかった。やがてプシユウ、と音がして、マスタールームのドアが開いた。

「やあーやあーおはよう！ サーヴァー……、いや、英靈性奴隷の諸君！ 無様な出迎えありがとねー！」

現れたのはやや小太りの、やたらに上機嫌な中年男性だ。

男の名前はここに記すまでのものでもなく——ましてや、藤丸立夏、という名でもない。

しかし彼は名実ともに、人理を守る最後のマスターとしてこの組織に君臨しているのだった。その証拠に、男の手には、鮮やかな真紅の令呪が刻まれている。片手ではなく左右の手の甲に、くつきりと。

「今日はお祭りだからね。楽しんでいこー♪」

そう言うと、小柄な男はすつと右手を身体の横に差し出した。そのまま歩きだせば、ぺちぺち……っ！♡と、サーヴァントたちのペニスに男の手が次々ぶち当たる。それでよけるどころか逆に勢いをつけ、彼らの陰茎をわざとらしく弾き飛ばしながら、鼻歌混じりに男は廊下を進んだ。

「やつぱり何度やっても、無抵抗な英靈のちんちん行列に痴漢行為しながら歩くのは最高だなあ〜！」

下衆なことを大声でのたまうマスターに対し、どのサーヴァントも直立不動の状態で、怒りの視線をぶつけている。

そのなかでもとりわけ激しい感情を込めていたのが、召喚されたばかりのギルガメッシュとオジマンディアスだった。

列の最後に並んだ彼らの方へ、男はのんびりと歩いて向かう。途中、プロトタイプのコウ・フリーンの前で立ち止まり、にやつきながら声をかけた。

「クーちゃん、今日も可愛いおちんちんだねえ」

「……くっ……！ やめろ、マスター！」

「またまたあ。昨日は『おまんこ突いてえ♡ 回避スキルなんて使いませんから、へなちよこランサークー・フリーンの隙だらけおまんまんをマスター好みのえっちなメス穴にしてやってくださいませえ♡』って叫んでたじゃない♡」

「~~~~~っ、やめろ、やめろっ、やめろ、やめろおおっ！」

今にも殺してやるぞと言わんばかりの怒声を上げるのに、クー・フリーンはまっすぐ立っただまま動こうとしない。

それをいいことに、男の手は好き放題に振舞っていた。

だらりと垂れた陰茎を片手でぶにぶににくによくによ弄び、逆の手で、玉袋をたふんたふんとたわませて遊ぶ。

「昨夜は楽しかったよねえ♡ 俺の部屋でさ、君の自慢のゲイ・ボルクの柄を、素っ裸の方がまだマシだろってレベルのエロポンテージ着こなした君のアナルに思いっきり突き立てて

あげて♡ ぐりぐり♡ぐりぐり♡ぐりぐりぐりぐり♡♡♡
 てしてやったらさ、あひ♡あひいいいい♡♡♡なっ
 さけなく叫んでイキまくるの♡ そのくせ、『こんな槍じやい
 やあ♡ こんなへっぼこな槍なんかじゃもう満足できないの
 ♡♡ おちんぼ♡ マスターのぶっ♡とおちんぼぶっ刺し
 てえ！♡ ランサーなのぶっ刺されたい♡ 淫乱クー
 の食欲まん♡♡ マスターのおちんぼしゃまでぐっぽりお仕
 置きしてくだしいい♡♡』なんてスカサハハスカデ
 イのいる前で絶叫してたんだよね♡ そんな、俺が無視して
 スカサハのまんこにハメまくってたら、『クーも！♡ クーも
 おまんこしてえええええ♡』ってダダこねて、ベッドの
 上でしょんべん漏らしたんだよね♡ ちんぼ欲しすぎてお漏
 らししちゃったクー・フリーンのあのとときの顔♡ 最高だっ
 たなあ♡ 師匠にも、コイツ子供の頃の小便垂れ小僧のまん
 まなんだな♡って思われちゃっただろうね♡ 恥ずかしか
 ったよね♡ そのあと泣きながらおちんぼ欲しがっちゃっ
 てる♡とこすっごく可愛かった！♡ せめてザーメンだけでも
 欲しくって、『師匠のおまんこ舐めさせてください！♡ マス
 ターのお精子しゃまがたっぷり入った師匠の年増おまんこ♡
 年季の入ったメスピッチケルトまんこ、なめなめしちやっつい
 いでしょう！♡ おまんこ舐めさせてくださいっ！♡ 師
 匠のまんこ穴タンクに溜まった種付け汁、セタンタにべろべろ

させてくだしいませ！♡ 師匠のおまんこべろべろしたい
 れしゅ♡♡ 師匠まんこを器にして、マスターの濃ゆい精
 液ごくごくさせて欲しいれしゅうううう……っ！♡』っ
 て懇願してきてさ♡ ケツまんこに宝具ぶっ刺さったまんま、
 師匠のまん穴しゃぶりまくってたよね♡ まんこの中にまで
 舌突っ込んでザーメン飲みつくして、空っぽになったら♡
 スカサハのおまんこぐっばあ……♡♡♡おっぴろげて、『おか
 わり、ちようだあい……♡♡』ってやってたよね♡ それはク
 ー・フリーンが俺のお精子エキスを飲みたいから師匠のまんこ
 に中出ししろってこと？♡♡♡聞いていたら、そうだって言った
 よね♡ 『クーがザーメン飲みたいからあ♡ 師匠のまんこ
 犯してください……♡ 中にとびゅ♡♡♡出してちやっつく
 ださい♡ この人ってか俺も含めケルトの人間は基本ヤリま
 くりなんでいまさらです♡ なんなら今すぐ目の前でセック
 スして証拠見せますう……っ！♡』って他人の性事情暴露し
 ながら俺の眼前で師弟アナルセックス披露したよね♡ スカ
 サハの足をM字開脚させた背面駆弁で、これでもかかっておま
 んこフルオープンで俺に膣穴見せつけながらの肛門姦♡ 敏
 捷性活かした高速腰振りで師匠の尻まんこを思いつきりガン
 掘りして……っ！♡ 『ほらおまんこびちよびちよになっ
 てるっ！♡ 師匠もしよせん女なんで、結局ちんぼには勝てな
 いんですよおっ♡ 即行受け入れ態勢できちやうからあ♡

ヴァギナ濡れ濡れにしてどうぞ♡ってなっちゃってるからあああああああ♡♡♡♡♡ だからマスター、この女犯してくださいっ！♡ ほら見えるでしょ♡ スカサハまんに中出ししてくださいっ！♡ いっぱい、いっぱい出して、そのザーメンっ、クーに飲ませてえ……♡ スカサハマン汁混じっちゃっても大丈夫だからあ！♡ 女神まんにたっぷり溜まった、ハメたて雄汁べろべろちゅるちゅるごくごくしたいの♡ だからこの女に中出ししてっ！♡ 行き遅れ女の寂しいおまんこハメ倒して、お腹いっぱいになるまでびゅーびゅーしてあげてっ♡ ほらおまんこくぱっ♡ くぱっ♡ 熟れ熟れまんこどうじよってくぱあ♡ 弟子にくぱくぱされてる可哀相なエロまんこ、ハメてあげてよお♡ ほらあっ！♡ ほらああああ……♡ スカサハハハスカダイのメス穴っ、セタンタがばっかあ♡ってしてあげるから好きなだけ犯しなよおお……♡』って、大陰唇くっぱり全開にしつつ膣口にも直接指入れてぐっばああああ……♡ってちんぼ誘って……♡ 煽り方といい、そんなに手際いいなんてケツハメ初めてじゃないでしょって指摘したら、『ガキの頃からやってましたあ♡ 青姦乱交複数プレイもケルトではマジ常識でしたっ♡ 村中の女にも男にもちんぼハメてたし、俺のケツまんこにもいっぱいハメてもらってました♡ もつと言ったら母さんにもちんぼハメたし親父にもしよっちゅう

ちんぼハメられてましたあ♡ 気持ちいいご褒美みたいなもんなんですっ！♡ 俺らの民族性ってそんなもんなんですうううう♡』って師匠のアナルにガンハメしながら叫んでたよね♡ 恥ずかしい人たち♡ 民族の恥曝してまでちんぼ欲しいんじやしょうがないねってスカサハまんにことクープ口トまんこを一回ずつ順番にハメてあげて、最後にどっちに中出しするかを賭けて勝負させてやったのは本面白かったなあ♡ 淫語ひどかった方の勝ちねって言っただけなら、二人とももうすっごいの♡ 『おまんこ♡ おまんこ♡ おまんこ♡ 中に出して欲しいの♡ おちんちんミルクびゅーってしてえ♡ あなた様のお精子便所になりたいんですう！♡ メス穴便器使ってえ！♡ 便器だから……、おしっこしてもらってもいいです！♡ お精子いただけるんならまんこにおしっこしーしてもらっても構いませんからああああ！♡ むしろ、おしっこしてください！♡ このおまんこはお便器ですから、おしっこをして欲しいです！♡ お務め果たさせてください！♡ 穢れたメス穴に正しいお役目を与えてやってくださいませえ！♡ お精子も、黄金の聖水も、淫乱おちんぼ袋の熱烈ご奉仕で受け止めさせてくださいませえええええええ……♡』ってケルトの本気見せちゃう大絶叫♡ 勝敗つかなかったからじゃあって言っただけトファック耐久戦させたのもサイコーだった♡ 師弟まんこ

に同時に手首まで突っ込んで、腹ん中でぐーぱーぐーぱーしてあげたら……♡ あつと言う間にクーがイっちゃったんだよね♡ 『あつあつダメダメ♡ 師匠の前でっ、おまんこイっきゅうううううううー……っ！♡』ってバカみたいなことゆって、びゅくびゅく何度も射精して潮まで吹いて、おまけに腰ガクガクさせて連続メスイキ……♡ 『師匠の前でメスつぷり曝しちゃうんんんっ！♡ おまんこに手首まで入れられて興奮するメス犬に成長しましたあ♡ってバレちゃうう！♡ 師匠以上のメスわんわんになれたよおー♡って決定的証拠掴まれちゃうのにつ！♡ イくのどまんないっ♡ おまんこ気持ちイイっ♡ おまんこの中でぐーぱーたまないれひゅうううう♡ もつとクーにおまんこしてえ♡ 意地悪して、いたぶって！♡ 師匠のまんこより、もつともつと……！♡ 若くてピチピチだからあ！♡ クーのおとこのこ子宮っ、いっぱいいいっばい可愛がって欲しいのおおまんちよつとも気持ちイイー……』でも、フィストファック耐久戦に負けちゃったから、愛しの俺の中出しびゅつびゅはスカサハに取られちゃったんだよね♡ 可哀想だからってカルデア職員のみなさんに部屋へ来てもらって、夜通し輪姦してもらったよね♡ 魔力ほぼゼロの一般人お精子じや絶対満足出来ないのに……♡ 自分より弱い普通の人間に

輪っかになつて囲まれて、おまんこもおクチもおてもみいんな使つて一生懸命おちんぼにご奉仕してるクーちゃんほんとキュートだったよ♡ もうどれが誰のちんぼだか分かんなくなっちゃって、『ちんぼ♡ おちんぼ♡ もつとちんぼお！♡ ザーメンちよおだい♡ わんわんわん♡ ちんぼの番犬、クー・フリーンプロトでしゅう♡ めしゅ犬わんわん、クーわんわん♡ おまんこわんちゃんのクーまんこにいいーっばいおちんぼハメハメして、クーのおまんこをわんわんわーん♡って気持ちよくさせてくだしいわんわん♡ 英霊まんこはちんぼに服従♡ 目の前におちんぼぼろんって出されたらはい♡って自主的にお股ぱつかん♡ ケツ肉引つ張つてここへどうぞ♡っておまんこくつばあ……♡ お尻触れつて言われたら、『お尻ふりふりっ♡ クー・フリーンがお尻ぷりぷりっ♡ おちんぼ欲しさにケツ振りぷりんぷりん♪』って歌いながらお尻左右に振りまくりますしっ♡ もつと芸しろつて言われたらっ、おちんちにマジックで顔描いて、亀頭に鈴ついたリボン巻きつけてちん振り芸しますす！♡ ちりんちりん♪って可愛い音を響かせながらっ、カクカク腰振つてガニ股全裸でダブルピースっ♡ おリボンでおめかしした恥ずかしいおちんちんをびたんびたん♡って高速で横振り♡ 縦振り♡ ぶるぶるぶるうーん♡って360度回転させて……っ♡ 『おまんこ英霊のおちん

ぼダ〜ンス♡ お股ぱっかーして両手でピースピースううううううう♡ 英雄性奴隷のおちんぼ欲しい欲しいダンス♡ ちんぽに媚び媚びなおまんこわんわんっぷり丸出しの惨めな姿♡ ザーメン払いでQPでのお支払いは結構ですっ、お手持ちのスマホ等でお好きなだけ撮ってくださあ〜いっ！♡ っ て叫んでおちんぼ回しの撮影会まで開催しちゃう♡ それから、各クラスのクー・フリーン呼びつけて全員でおちんぼ芸撮られたい♡ “おちんちんぐるぐる〜っ！♡” っ てガニ股全裸のスクワットポーズで声揃えて叫びたいし♡ “おまんこ見てえ〜っ！♡” っ て全員でケツ並べておまんこくばあして超至近距離でまんまん動画撮影されたい♡ “どのクーおまんこも食べ放題だよ♡ 味比べもできちゃうよ♡ すけべなクーまんこつまみ食いしてえ♡ みんなで揃ってめこ穴きゅん♡きゅん♡きゅん♡っしてしておちんぽお誘いしますからあ♡ 食べて♡ ハメて♡ いっぱい勢ぞろいのクー・フリーンおまんこお♡ どれでも無料でハメ放題だよおおおおおお……っ♡” っ てまんこヒクつかせながら全員でおねだり♡とか♡ えっただよお♡ すっごいえっただよお……！♡ こんな頭変になっっちゃう♡

♡ クーの頭、おまんこ頭になっただよああ……♡ わんわん、わん♡ あっあ、キモチイイ、えっちなキモチイイよおおおお……っ♡』ってエロ妄想垂れ流しながら職員

のみなさんの立ちション聖水を頭から浴びまくってたとこほんつとにヤバかったよ♡ じよわあああああ……♡ ……っ♡ じよばばばばばばば……♡ っ て全方位からしょんべん砲爆撃♡ 頭からぐしょ濡れ、しょんべんまみれ♡ まあ君はハアハア言っつて、おまんこわんわんらしく犬のおすわりの姿勢したまんま、口開けて舌出して小便飲みまくっつてみっつともなくカクカクカクカク腰振っつて、連続でメスイキしまくっつてたけど♡ 君、頭イかれてただろうから知らないだろうけど、あんとき君にしよんべんかけてたの、男性職員だけじゃないんだぜ♡ お前のフアンだっつて女性職員も俺の部屋へ来てさ、ボトム脱いで立ったまままんこ広げってお前におしっこぶっかけて、恍惚とした顔して喜んでたんだよ♡ 英霊なのにな♡ 英雄のくせにな♡ 守るべき人間の、それも雌におしっこひっつけられてカクンカクン腰振っつて無限メスイキ♡ 『おしっこ……♡ ……♡ おひっこいイ♡ お便器の自覚芽生えてイイっ♡ もっとかけてえ♡ ザーメンもかけてえ♡ わんわんっ！♡ わんわん♡ おしっこしーしーしてえ♡ 頭に、ちくびに、それからちろんおまんこにっ♡ たっぷりしーしーぶっかけて、クーのこと無料公衆変態おまんこ便器わんちゃんに最終再臨させてやっつてくだちやいませええええ……っ♡』ってトロ顔スマイルでアへっつてたんだぜ♡ ほんと

に君って可愛い……」

「うるせえうるせえ、うるせえよっ！ ♡ 黙れこのっ、クソつ、くそおおおおおお……っ！ ♡」

「あははは、素に戻ると口悪いなあ！ そういうところもすごく可愛いよお、おまんこ便器わーんちゃん ♡ 醜態みんなに聞かれちゃって、こゝんな恥ずかしいこともないよねえ！ ♡ みつともない ♡ あっはははははははははは ♡」

真っ赤になって怒鳴るクー・フリーンにも構わずに、男のややぼっちゃりとした指は、相変わらず彼の性器をいじくつている。当初だらりと垂れていたはずの箇所は張り詰めてすっかり勃ち上がり、先端から透明な蜜を零していた。

「ふりふり怒りながらおちんちんフル勃起しちゃってカッコ悪いねえ？ ♡ 我慢汁だからだらのちんこモロ出し露出狂スタイルでなーに真面目にキレてんのかなあ？ ♡ もしかしてもっとしてっってことなのかなーあ？ ♡ ほれシコシコ ♡ シコシコ ♡ クーちゃんのバキバキ勃起おちんちんシコシコシコおおーっ ♡」

「ひ……っ！ ♡ あ、あ、んぐう……っ！ ♡ てめえ、てめえ……、あん、あん、あ……っ ♡ イ……、ヤ、だ、イクっ、イ……っ ♡ イつちま、ふあううううううっ！ ♡」

「はい、おしまーい ♡ クーちゃん生意気だからイかせたげない ♡ おちんちんおっきのまんまで突っ立って、しばらく

反省しててください ♡」

リング状にした指で思い切りしごいていた陰茎を唐突に手放せば、硬くなったそれはぶるんっ！ ♡と雄々しく跳ね、透明な雫をいくつも散らした。

「……あ、ウソ、お……！！ ♡」

思わず漏れた声があんまりにも物欲しそうだったことに、クー・フリーンは改めて赤面する。泣きそうなくらいに顔を歪め、そそり立った雄の象徴をそのままに、悔しげに下を向いた。やりとりを聞かされていた周りのサーヴァントたちも、憤りをこらえながら、黙って彼から目を逸らす。

「んじゃばいばい ♪」

この状況の支配者である男は、悠々とその場を離れていった。しばらく進み、ひととき鋭い視線に気づくと、にたりと笑って立ち止まる。

「どうも、新入りのおふたりさん ♡ 先輩のダツサイ雌つぶり、ちゃあんと全部聞こえたかな？ ♡」

「下衆が……」

「畜生にも劣るな。フアラオたる余の前から消え失せよ」

「ちんちん丸出し状態で罵倒とか！ ♡ 本当にカッコ悪いのはどっちだろうねえ ♡」

「……っ ♡」

「く……」

ギルガメッシュもオジマンディアスも、腰回りのパーツを除いた下衣が、足首付近で丸まっている。両者ともやたらに上半身の露出が多い装いだっただので、肩のあたりだけ着込んでいるように、なおさらちぐはぐな見た目になっていた。

「じゃあもつと笑えるポーズにさせてあげるよ♡ 令呪を以てマスターが命ずる！ 英霊ども！」 限界まで脚を開いてガニ股にし、両手でダブルピースを決める！

「！」

「な……っ！」

真つ赤な光が一瞬きらめき、男の手の甲のしるしが輝く。

その場にいたサーヴァントたちは全員、まったく同じタイミングで、がばりと股を開き、えげつないハンドサインを頭の高さに作ってみせた。当然ふたりの王も、同様に馬鹿馬鹿しい格好をさせられている。今にもブチきれそうな顔で、ギルガメッシュは中年男を見上げた。

「やはり令呪か……」

「うん、君らにはこれが一番だよね♡ それも俺のは特殊性……♡ 普通のが比較にならないほど強力だし、たった三画なんてケチなことじゃないんだ♡ 俺の興奮度合いによつて、いくらでも復活してくれる……！！♡ これで君たち全員に、いつでも好き放題やり放題できるってわけ♡」

「そんなことがあつてたまるか！」

「いやいや♡ これは、聖杯の意思なんだよ♡ 人理を破滅させようという強大な敵に対抗するための、人類史上最強の手段……♡ 性欲に任せて、俺たちはどんどん強くなる♡ そうやって人理を守り、人の世を紡いでいけて聖杯が俺に頼み込んでんのさ♡ その証拠に……、」

「！」

「貴様ッ！」

神聖なる肉体へ、肥えた指が許可もなく触れる。王たちの性を器を左右それぞれの手に乗せると、男は、無遠慮に揉み始めた。

「ほおくら♡ ちょっとおちんちんに触っただけでこんな……♡ おかしいだろう？ 不思議だろう？♡ しょうがないんだなあ、聖杯が俺にくれた能力なんだから……♡ なにもしなくても身体から媚薬効果が発生する、『強制発情』のチートスキル♡ 俺のそばにいただけで、どんな英霊も発情期の雌犬みたいになるんだよっ！♡ 大事な人類を守っていくためには、お前ら英雄の貞操や自尊心なんて踏みにじっても構わないんだってさ♡ 聖杯つてのは本当に、めつちやくちやな判断してくれるクソみたいに罪深い機構だよねえ♡」

「ぐ……！！♡」

「屑めが……！！♡」

にわかには信じられないような台詞も、実感をともなえば簡単に否定できるものでもなかった。

生前には多くの女性を抱いた彼らであつたのに、あろうことか、いつべんに腰が砕けそうな快感を感じてしまつていただけだ。ほんの少し手でいじられただけで。急所を煽られただけで。そんな、まさかと思うのに、身体は上気し、頬は染まり、肌がじつとりと汗ばんでいく。

「くくくくなんだと……っ！♡ぐ、くうっ！♡」

「触れるな……！！♡ 余の玉体に触れるなというのだ、野蛮な猿め！♡」

「無抵抗で睨まれてもゼーンぜん怖くありません♡ ギルガメツシュのちんちんは陰毛までキラツキラの金髪でキレイだね♡ オジマンディアスのちんこは、やたら色が濃いなー♡ 褐色肌だとちんこもこうなるんだあ♡ 面白いねー♡」

「よ、せ……！！♡」

「やめろ……っ！♡」

そうは言つても、身体は刺激に正直だつた。しゅこ♡しゅこ♡しゅこ♡しゅこ♡と擦られた陰茎は見事に腹まで反り返り、しつかり天を仰いでいる。

「嬉しくせに♡ ガニ股ダブルピースしながらヤダヤダ言われても説得力ゼロだよねー！♡ 見てほらこのおちんちん♡ こんなに立派になつちやつた♡ ふたりとも細身なのに、結構ちんこデカいんだねえ意外だよ♡ お上品な顔して、

お股にこんなくつついてると思うとたままないー♡」

「くくくくくくあ、あ……っ！♡」

「ほおお……っ！♡ こんつ、こんなことが……っ！♡」

息は乱れ、酸素を求めて開いた唇からはとろとろ涎が垂れ始める。令呪の力により馬鹿げたポーズで固定されるのは屈辱ではあつたが、そうでなければどうなつていただろう。震え身悶え、腰を振り、もしかしたら、もつともつととねだるように、陰部を男へと突き出していたのかもしれない。

「よしよし、そろそろイくな……。おーいマッシュ！ いつも
の！」

「はい先輩♡」

呼ばれて駆け寄つてきたマッシュの手には、ビデオカメラが握られていた。

マッシュは少し距離をとり、男と、男に弄ばれる半裸のふたりが綺麗に画面に収まるように調節をする。

「小娘……！！♡ な……、なに、を……！！♡」

「召喚後初射精の記念撮影だよ♡ ここにいるコたちはみんな撮ってるからね、恥ずかしがらなくていい……わけじゃないけど♡ まあ精々恥じらうところを撮らせてよ♡ あとで職員のみなさんにも、日頃のお務めのご褒美としてデータ配るからね♡」

「余を……、フアラオをつ、愚弄するか！！♡」

「愚弄っていうか、賤だよね♡ 君らはこれから俺の——、人理を守るための、性奴隷になるんですぅ♡」

「くぅ……っ！♡」

「ぐあ……っ！♡」

性奴隷、という単語を耳にした途端、強烈な悦がふたりの頭のなかで弾けた。そうあるべき、と導くかのごとく、鮮烈な快感が肉体の制御を乗っ取っていく。

「おふたりとも！ すごくいやらしく撮れていますよ！ すばらしいです！」

「抜かせ外道めええ……っ！♡ ひぐぅ、ぐ……っ！♡」

「太陽王たる余が、なんたる無様な……っ！♡ ん、あっ♡」

しこ♡しこ♡しこ♡しこ♡しこ♡ちゅく♡ちゅく♡ちゅく♡ちゅく♡ちゅく♡と、愛撫にどんどん水音が混じる。見るからに張った二本の男性器は、もう耐えられないと訴えていた。

「そろそろだね！♡ じゃあ記念ムービーらしく……♡ 令呪を以て命ずる！ ギルガメッシュ、オジマンディアスよ！」

「声を抑え、憤死するほどの淫語で果てよ！ 浅ましい言葉で、自らの絶頂をここに刻め！」

「ひ……っ♡」

「貴様ア……っ！♡」

鋭い閃光が脳を揺する。英雄としての矜持が、英霊としての誇りが塗りつぶされ——、そうして受ける屈辱が、一気に性感

へと反転した。

「イけええ！♡ イけええ、英雄王、太陽王！♡ 民に曝せぬ哀れな姿♡ この場にいる全員に見せつけて、語って聞かせて、半永久的に残すがいいさ！♡ お前らの痴態！♡ みんなが見るぞ！♡ みんなに知られるぞ！♡ 被虐に感じてるんだろう！♡ 証拠を残せ！♡ カメラを見ろ！♡ アへ顔曝して、いつちまえええええ……っ！♡」

「ふぎいいいいっ！♡」

「んぐううううう……っ！♡」

ぐちゅ！♡ぐちゅ！♡ぐちゅ！♡ぐちゅ！♡と激しくペニスをしごかれて、ふたりとも目には涙が浮かんでいる。悔しさのあまり噛み締めた唇の端には泡が溜まっていたが、主人の命令により、視線はまっすぐカメラに向けたままだった。

(この我が……っ！♡)

(オジマンディアスたる余が……っ！♡)

それぞれの顔の両横に間抜けなビースサインを構え、下劣な角度に足を開いてカメラのレンズに股間を曝す。わなわなと身を震わせながらも一切抵抗できないという恥辱が、溢れんばかりの快楽に変換され押し寄せる。

経験のない窮境に、とうとうふたりは屈服した。

色白の腰と、褐色の腰、両方ともがぴくん♡ぴくん♡ぴくん♡とびくん！♡と淫靡な具合に幾度も揺れ、己の確かな敗北

「マッシュもすっかり有能になったねえ♡ 了解了解、いっくよ〜♡……♡」

ゆっくり手を引き、後方へ。そして勢いをつけ、二色の尻を同時に平手でばっしいいいいいいいいいいいん！♡と叩く。

「んきよおおおおおおおおおおおおお！♡」

「あぐううううううううううううううう！♡」

惰性でカメラの前に突き出された下腹はそのままに、再度ふたりは遂情した。両手でVサインを作ったまま、やや元気のなくなってしまうた精液をだらだらと性器から垂らす。抜けきらない衝撃に、かく♡かく♡かく♡と卑猥な動きで、何度も腰が突き上げられた。

「はい、オツケーです！♡ 英雄王と太陽王、おふたり分のお尻ペンペン絶頂シーン頂きました♡ 思ったよりもお間抜けなお声も撮れました、マッシュ・キリエライト感激です！♡」

「グッジョーブ、マッシュ！♡ この調子でいこう！♡」

「はい先輩♡」

先輩後輩の無邪気な会話に聞こえなくもないが、そのすぐ横では、ギルガメッシュとオジマンディアスが未だにガニ股ダブルピースアクメを極め、カタカタ小刻みに震えている。

「じゃあみんな、食堂に移動しよっか♡ 楽しい歓迎パーティの始まりだよー！♡」

男は笑顔で、すっと人差し指を立てる。それから床面の、ふ

たりが撒き散らした精液を指し示した。

「主役は俺が連れてくから、このへん床掃除しといて？ 王様たちの採れたてザーメン♡ 舐めなよほら、ペロペロして綺麗にして」

しんと空気が冷えても、男は少しも動じない。

やがて、クー・フリーンプロトタイプ、アキレウス、イアソンの三者が前に出て、静かに床にひざまずいた。

「そうそ♡ 一滴も残すんじゃないぞ〜？♡」

三人とも無言のままうずくまり、乳白色の体液を舐め取っている。ただしそのやり方は、どこか微妙におかしかった。相変わらず露出した尻を主人に差し出すようにして、軽く左右に振りながら床を舐めているのだ。

クー・フリーンに至っては尻穴をきゅう♡きゅう♡とすばませ、そうしてあるうことか、そろそろと自分で尻肉に手をやり、くはあ……♡と開いて肛門の収縮を見せつけてしまっている。

「マ、マスター……♡ まずはあ、俺……♡」

「あーあてられちゃったね♡ 目の前であんなに気持ち良さそうにされちゃったら、生意気クープロトもコロっといっちゃうかあ……♡ アキレウスも、イアソンも♡ んー可愛いね♡ どうしよっかな♡」

クー・フリーンに続き、アキレウス、イアソンも顔を上げる。

彼らの瞳はそれぞれの色合いを持っているのに、みな同じように、淫靡にとろけてしまっていた。

「えっちな顔しちゃってさあ……♡　じゃあ床のそれ舐めてさ、みんなで口移ししてよ。全員でぐるぐるザーメンキスしてできる?♡」

「でき、る……!!♡　できる……っ♡」

クー・フリーンは再び床を舐め、ペロペロ♡ずずず♡と精液を口に含んだ。

すぐさま横にいたアキレウスにキスをして、口内の淫液を渡し始める。

「ん……っ!♡」

アキレウスは驚いた表情だったが、観念したように瞼を閉じた。好戦的な青年同士で、熱い口付けが交わされる。

「ふあ……♡　んん、ん……っ、ふ……♡」

「んくう……♡　つぶあ、んちゅ、んうう……っ♡」

入れられた精液をアキレウスが返し、今度はクー・フリーンが受け止める。舌を絡めて何往復もやりとりをしたあと、クー・フリーンはアキレウスに、口を開けて待つようにジェスチャーで伝えた。

「……?♡　……!!♡」

少し離れ、クー・フリーンが上から、アキレウスの顔を覗き込む。そっと口を開き、伸ばした舌先から、どろんと白濁を垂

らした。その先にはアキレウスの唾内があつて、とろとろと蜂蜜を注ぐように、精液が口の中へと落ちていく。

「ふは……♡　さっすが遊び慣れてる子は違うよなあ……♡」

マスターがそう呟くと、クー・フリーンは満足げに目を細めた。そこへイアソンが混じり、またちゅちゅちゅちゅと、男同士のディープキスが繰り返される。舌を擦り合い、涎を舐め、精液越しに唇をこすり合わせていく。

「はん……♡」

「ん♡」

「ふう……、ん♡」

彼らの切ない吐息を耳にしながら、男はズボンに手を入れ、自ら生殖器をしゃがんでいた。

「あー可愛い……♡　うちの節操なしエロサーヴァントども♡　普段はツンだけど発情スキル効きまくり、サーグ雌っぽくなつてくれちゃって♡　命懸けで人理守ってる甲斐あるわほんと……うっ!♡」

どびゅ♡と溢れた精液を手で受けた男は、その汚れた掌を彼らの前に突き出した。

「はい、ごほうび♡　俺のザーメン♡　また今度ハメたげるから、今日はこれで我慢してね♡」

「……!!♡」

ぱつと三人の顔が輝いて、三方向から舌尖での奉仕が始まった。

あつという間に舐め取ってしまつてからは、指をくわえてフェラチオの要領でしゃぶったり、れろれろと舌を下品に上下させ、おかわりをねだつたりし始める。

「マスター♡」

「マスター……!!♡」

「マスターあ……ん、あつ!♡」

「え?」

三者三様の声で甘く主人を呼んだあと、突然イアソンが射精した。こらえきれずにびゅく♡びゅく♡と、舐めたばかりの床を汚していく。

「あらら……♡ せっかく綺麗にしたのに、イアソンびゅつびゅしちやつたの♡ 我慢できなさすぎでしょ♡ ほんつとに頭いいだけのへたれだねお前♡ このへたれちゃん♡ 奥さんにも早漏だつて泣かれてたんだろ♡」

「ふあい♡ 早すぎるつて馬鹿にされましたあ……♡ あつあつ出る♡ 怒られながら射精気持ちいいよお……♡♡」

「このドMイケメンが♡ だめだよ、これからパーティがあるんだから。三人とも、またそこ綺麗に舐めて片付けといて! 分かった……?♡♡」

こくこくこく、と素直に三人は頷く。

そうして全員、申し合わせたように、同じポーズをとりだした。

床にしゃがみ、股を開き、あごの辺りで拳を握る。躰の行き届いた愛玩犬がやるような、いわゆる「ちんちん」と呼ばれる体勢だ。

「分かりました、ご主人様ああ♡ わんわん、わあん……♡」

さつきイッたばかりだというのにイアソンまでも勃起して、いきり立った陰茎が三人分、仲良く横に並んでいる。

次第に腰を揺らし始め、ふるふる竿を振つて誘う仕草まで見える始末で、あまりの浅ましさに、男もくふくふと笑つてしまふほどだった。

「可愛くおちんちんふりふりしてもだめ!♡ 俺はもう行くからね。マシユ! あのだども、一回抜いてあげてから来てよ。ちんちん振つて悦んできるとこ罵倒しながら撮影してあげたら、即びゅつびゅつびゅつて射精しちゃうと思うからさ!♡ んで、汚した床を舐めて綺麗にするとこも、全部撮つて俺にデータちょうだい。また今度、こいつらが素面になったときに見せつけてやるんだあ♡」

「承知しました!♡」

恐ろしい会話が交わされていることにももう気付けずに、三匹の犬は、はっ♡はっ♡はっ♡はっ♡と息を弾ませ、愛らしく男性器を上下に振り続けている。

「よおしよし、おちんぼ大好きえつちなおまんこわんこちゃんなのみなさん……!!」先輩の命により、このマッシュ・キリエライトが、みなさんの痴態をばっちり撮ってあげますからね！♡ お返事はいかがですか??♡」

「はあい!♡ おちんちん撮ってくださいあい!♡ 犬の”ちんちん”ポーズでゆらゆら揺れてる恥知らずの勃起おちんちん♡ はしたない犬の、とつてもいけない英雄ちんちん……♡ いっぱい近くで、ミルク出ちゃうまで♡ しつかりじつくり、撮っちゃってくださいあい!♡ ちんちん撮ってください!♡ おちんちん撮ってください!♡ 勃起してるメス犬ちんちん思いつきりコケにしながら撮ってくださいあい!♡ 無様だね♡ って指差しながら笑いものにしてくださいあい!♡ 興奮する♡ 興奮するうっ♡ ちんちん撮られて笑われたらすっごいすっごい興奮すりゆうっ♡ 変態性癖♡ もうだめだあ♡ ちんちん振ります勃起おちんちんぶるぶる振りますっ!♡ ちんちんぶるぶる♡ ちんちんぶるぶるっ!♡ 三人並んでおちんこぶるぶるっ!♡ 揃いも揃って腰カクカクしてちんちんぶるぶるとこ撮影されんの気持ちいいっ!♡ おちんちん見比べてっ♡ 長さ太さ硬

さカリのかきタマタマのでつかさあああああっ!♡ お毛々の生え方もっ♡ 点数つけてっ♡ 好き勝手にマルペケつけてっ、俺たちのおちんこ百点満点で採点してあげてください♡ 俺らのふりふりおちんこちゃんランク付けして性的に消費してくださいっ♡ デミ・サーヴァントとはいえ守るべき人間のっ、それもメスにつ♡ 男のシンボル振り回してアへつてるとこ撮られんの最低すぎてサイツコーに気持ちいいれすもつと撮ってえ!♡ ちんちん!♡ 撮ってえ!♡ おちんちん撮ってください!♡ いっぱいちんちん振りますから!♡ 大事なちんちんでおちんこ芸をご披露しますからあああ!♡ ちんちん見てえ!♡ 撮ってえ!♡ 指差して笑ってえ!♡ フル勃起ちんちんびよんびよんびよんっ!♡ おちんちんダンスですう、犬の”ちんちん”ポーズでおちんちんダンスっ!♡ だっておちんちん見られて撮られて笑われたいからあっ!♡ そしたらすっごい気持ちいいからあ……っ!♡ 変態犬でしゅっ、おちんちん見られたいメス犬ですわんわん♡ もっと見て見てえ♡ ってちんこ振るう♡ 男も、女も、サーヴァントでも、子供もお……っ!♡ みんなみんなあ、おちんちん見てえ!♡ 女のアンコに突っ込むんじやなくって観賞用になっちゃったカワイイーなおちんちん♡ 振ってるよお♡ 見て見て撮ってえ!♡ って一生懸命振ってるよお♡ 必死でちん振りっ♡ イ

「歩くんだよ、犬」

「あ……？？」

「う……♡」

力強く引つ張られ、呆けたままで歩き出す。

ごくごく自然に動物のような四つ足で進んだ彼らに、救いの手を差し出そうとする者は誰一人としていなかった。

むしろサーヴァントたちは、下半身を露出したままぞろぞろと一列に並び、そのあとをついていく。

このおかしな行列には、カルデア内における異常な力関係が、まざまざと現れているのだった。

以前からいた者たちからすれば、食堂の様相はがらりと変貌してしまっていた。

室内は広く、それなりに規模のある大宴会を行っても支障がないほどの席数がある。

加えて、目を引くのは大きなステージだった。

劇場の舞台を彷彿とさせる豪華な壇上の中央には、全裸のギルガメッシュとオジマンディアスが横に並んで突っ立っている。

る。この場に連れて来られるなり令呪を使われ、ふたりとも仁王立ちのまま身動きがとれない状態だった。とはいえマスターがいったん離れていったことで発情スキルの効果が薄れたのか、あのこらえ難い性欲は落ち着きを取り戻している。よつて両者はこの危機からなんとか脱出すべく、まずは状況把握に徹していたのだった。

彼らの視線の先には、多くのサーヴァントたちがいた。なぜか男のサーヴァントばかりで、奇妙なことに、役割分担がなされているようだった。オス役、らしきサーヴァントはいかにも体格が良い者が多く、複数のメス役、らしきサーヴァントたち——先ほど下半身を露出させられていた者たち——を囲って、偉そうに席に座っている。オス役はメス役を足元にはべらせたり、自身のペニスをやぶらせたり、勝手に服を脱がせたりと、まるでハーレムの主であるかのように振舞っていた。そうこうするうちにメス役たちは土下座してからオスのペニスに跨って自ら腰を振り、次々性交をし始める。あちらこちらから嬌声や、ぎしぎし椅子の軋む音が聞こえてきた。

完全に狂っている。狂っているのが、常態化してしまっている。そうしてこの空気が今のカルデアを象徴しているのだと、ふたりの王は感じ取っていた。

「……さて、賢王よ。これをどう見る」

オジマンディアスが口を開いた。

尊大だが温厚な太陽王は、琥珀色の瞳に深い怒りをたたえている。

「令呪が厄介だな」

同じく真紅の双眸に憤怒を宿したギルガメッシュは淡々と応えた。口調こそ冷静を装ってはいたが、表情はすでにキレかかっているかと表現できそうなものだった。

なにせ、眼前に、もうひとりの己が堂々と見物にやってきていたのだ。

ステージを鑑賞するために用意されたのだろう客席には、黄金の鎧をまとったアーチャー・ギルガメッシュが足を組んで腰掛け、こちらに向かってひらひらと手を振っている。どういう判断基準なのだか、彼はオス役に収まったようだ。では己はいったいなんなのだ、と、キャスター・ギルガメッシュの怒りはさらに燃え上がった。

「貴様、私の窮地に黙って観客気取りとは落ちたものだなたわけ!! なにをへらへら笑っている!?」

「そりゃあ、笑うよお。だって、これから楽しいパーティがは

じまるんだもん！」

「!」

「!」

気配を感じさせずに近づいてきたのは、ジャック・ザ・リッパードだった。その後ろに、ナーサリー・ライム、アビゲイル、ジャンヌリイが控えている。

「おかあさーん! 準備、いいよお! いつでも始められるよー!」

ジャックがそう声を上げると、醜悪な男、彼女らのマスターも、会場ど真ん中の席から手を振り返す。しばらくして、室内に設置されていた照明装置が、いつせいに壇上の役者を照らした。

「これでいーす、あーんど、じえんとるめん! これより、新入りサーヴァントさんたちの身体検査を始めまーす!」

「身、体……?」

「検査……?」

ぽかんとする両者そっちのけで、ジャックたちは舞台上に置かれた箱から、なにやらせつせと取り出し始めた。

「じゃあ計るよおー!」

「おい、その子供……?」

「なんだ？」

メジャーを片手に、ジャックとナーサリー・ライムが寄って来る。よいしょ、よいしょとギルガメッシュらの身体へよじ登ると、観客席に向かって叫んだ。

「じゃあ、おっぱいの大きさからねー！」

「は!？」

「おっぱ、……!？」

言うが早いのか、ジャックたちは巻取り式のメジャーで、ギルガメッシュとオジマンディアス、それぞれの乳輪の大きさを計測し始める。そしてここによごによごに耳打ちをしあって、数値の情報を交換した。

「はぁーい、結果出ました！ おっぱいのまあるいのの大きさはね、ギルガメッシュの勝ち！ ギルガメッシュの方がおっぱいのまあるいの、大きいでーす！」

「……!!!」

「余の負けとな!？」

満場の拍手のなか、素っ裸のふたりだけが周囲から取り残されている。

わけもわからない状況でなぜか乳輪の大きさを比較されている。いくら頭の回転の早い彼らとて、そんな状態を簡単に受け入れられるはずもなかった。

「ええい、一体なにをしておるのだ!？ 子供よ！ おい！ やめんか！」

「今度はなにを……！ 止せ！ そこに触れるでない！」

「次はねー、おちんちんでーす！」

「ごめんなさいね、これは決まりなの。あたしたち子供の、大事なお仕事なのよ！」

身軽に床面へと下りて、ジャックとナーサリーがまたメジャーを押し当てる。ふたりのペニスの根元に目盛りを合わせ、先端までの長さを計りだす。

「結果が出たわ、出たわ！ おちんちんの大きさは、チョコ肌のおにいさんの勝ちよ！ こっちのおにいさんの方が、おちんちんがながーいのよ！」

「当然である！」

「なんだと!？」

再び割れんばかりの拍手が起こる。

なぜかこのシチュエーションでふんぞり返るオジマンディアスを、ギルガメッシュは睨みつけた。

「くだらんことを申すなつ、馬鹿にされておるのだぞ！」

「しかし勝負は勝負だ！ 余は勝利を貴ぶ！」

「でもタマタマの重さはねえ、ギルガメッシュの勝ちでーす！」

「なにイ!？」

「よし、私の勝ち！ ……ではない、太陽の！ 結束してこの場をどうにかせねば……、！」

手際よく隼丸の重さを量られ、勢いに飲まれかけていたふたりではあったが。

次に起ころうとしていることを察し、ぎくりと身体を強張らせた。令呪の力で未だ自由に動くこともできずただ立ち尽くすほかない王たちの足元に、幼い子供のサーヴァントが、二人ずつ寄り添っている。

「じゃあ今度はこつちね？」

そう言つてジャックはアビゲイルを伴い、ギルガメッシュの陰茎に小さな手で触れた。

「あなたのお相手はあたしたちよ」

ナーサリーもにこやかに笑つて、ジャンヌリイとともに、オジマンディアスのペニスを掴む。

「おい……よせ、よさんか！」

「余の身体に触れるでない！ やめ……、おふうっ♡」

制止の声もむなしく、幼女たちは次々に、彼らの男根に手を伸ばし、舌を這わせ始めた。身長足りない分はあらかじめ準備されていた踏み台まで使い、小さな口を開けて懸命に舐めしやぶっている。

「次はふえらちお勝負なんだよ♡」

「幼女にここまでやらせるとは……！ 卑劣にもほどがあ、ん、くうう……っ♡」

「なん、なんだこれは、たかが口淫だというのにこの余が……！！♡ 耐えられん、だと……っ!?!♡」

令呪の縛りによって直立したままではあるのだが、ふたりの反応は遠目にもあからさまだった。

はっ♡はっ♡と息は乱れ、頬には朱が差している。

王という立場上、伽の経験も多かったがゆえに、この状態はどう考えても不可解だった。

子供たちの淫技は拙く、観客からの見栄えを気にしてか、陰茎を口に銜えるでもない。二人一組でペニスを挟んで向かい合、亀頭や裏筋をべろべろしゃぶしやぶと舌と口で擦るだけの、まさに児戯である。それなのに、なぜ。

答えを求めて走らせた視線の先で、この宴の首謀者にはやにやと己の手の甲を指差していた。

令呪の使用により薄まっていた一画が、すうつと鮮やかにその色を取り戻す。

「恥知らずめが……っ！っ！っ！」

「やはり新たな令呪か……！！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！」

「わーい、おちんちんおつきくなつた！っ！」

「いつイクのかしら！っ！ 楽しみね、楽しみね！っ！」

怒声を上げようとしても、快感が邪魔をする。小さな口が舌が手が、それらの触れる場所から、怒濤のような快楽が押し寄せてくる。

「ふざけた真似はやめい！っ！ 貴様らとて、サーヴァントだろう！っ！ 英霊の誇りはないのか！っ！」

「愛撫とはいえ余の許しもなく施すなどと、不敬の極みである！っ！ 下がれ、下がれ子供たちよ……っ！っ！っ！」

「どうして？っ！ 気持ちいいことって、いいことでしょ？っ！」

「そうよそうよ！っ！ 嫌がることなんてないじゃないっ！」

「く……っ！っ！っ！」

「卑怯な……っ！っ！」

ある種無垢な瞳にそう迫られると、令呪の強制力がなくとも少々辛い。アーチャーの方であればまた別だったかもしれないが、この場にいるのは、エルキドゥの存在によってより人間の

感情を理解した賢王ギルガメッシュと、民を愛し愛された慈悲深いフアラオ、オジマンディアスなのだった。

そうしてふたりが些細な抵抗を重ねることに、子供たちはますます捻じ曲がっていく。まっすぐに、無邪気なままに、度を越えた淫欲の渦へとその身を投じていく。べろ♡れる♡れる♡♡と見せつけるようにペニスを舐めながら、少女たちは口々に言った。

「おにいさんたち、恥ずかしがってるんだね！っ！ おかあさんがね、恥ずかしがるのもいいことだって言ってたよ！っ！ ほかあさんはね、恥ずかしがってるひとがだあいすきなんだって！っ！ 特におとこのひとはね、イヤイヤって言ってもおちんちんが勃起して、全然嫌がってないのがすぐに分かっちゃうからすっごく面白いんだってさ！っ！ ほかあさんの言う通りだね！っ！ おにいさんたち、こんなに勃起してるんだもんね！っ！ わたしたち子供に人前でおちんちんをべろべろされて、興奮してるってことだよね！っ！ わたしたちだって洋服を着てるのに、自分たちは全裸で、勃起おちんちんを丸出しにしちやっつてっ！ 恥ずかしくないの？っ！ うそうそ、恥ずかしいよねえ！っ！ 恥ずかしくって気持ちいいから、おちんちんがこんなになってるんだよね！っ！ おにいさんたちかーわいい！っ！ ほかあさんが言ってた通りだあ！っ！ おとこのひとって可愛いね！っ！ 解体する以外にも、こおんな使い道がある

んだね……♡ おちんちんべろべろしてあげるね、べろべろ
 べろ♡ 幼女のおクチでべろべろ♡ どうかな、うふふ
 ♡ 気持ちいいんだね♡ あなたたち王様なんですよ、王様
 なのにこんな……♡ 子供の前で、みんなの前で、おちんちん
 かたあくして恥ずかしい♡ おツユ出てきてるよ、どうしち
 やったのかな？♡ もしかしてイくのかな？♡ 子供のべ
 ろべろでイっちやうのかなあ♡ それってすごく恥ずかし
 くて惨めじゃない？♡ だって子供だよ？♡ サーヴァ
 ントのくせに、ほんとはすごく強くて人理を守る存在な
 くせに、わたしたちみたいな小さなおんなのこにおちんちんべ
 ろべろされるだけでイっちやうの？♡ 無抵抗でイっちやう
 の？♡ みんなにイくとこ見られちやうのに、それでもあつ
 さりイっちやうの？♡ おにいさんたちって本当に……♡
 えっちなだね♡ いやらしいね♡ ああほらもうおちんちん
 がばんっばん♡ 子供に言葉責めされると感じちやう変態な
 王様だって、もうみんなにバレちやったね！♡」

「昔からよくある話だけれど、子供相手に欲情するなんて本当
 に最低なひとたちね♡ ロリっ子ボイスで感じちやって、大
 人おちんちんがばんっばん……♡ もしかして生前からの、
 密かな願望だったりするのかしら♡ ちっちゃなおんなのこ
 に囲まれておちんちんべろべろされたー♡って思ってた
 したのかしら……？♡ 最低ね♡ 最悪ね♡ いけない、い

けない大人だわ！♡ そうだ、みんなに見られて反省しなさ
 いよ♡ 全裸で突っ立って幼女におちんこ舐められて、いと
 も容易く射精しちやってあひー♡ってなってるよ♡見られて
 反省しなさいよ！♡ ほんとになんなのこのおちんちんは
 ♡ 罵倒されるたんびに大きくなっちやってるとじゃない♡
 おんなのひとのおまんこに突っ込むよりも、あたしたち幼女に
 からかわれる方が感じちやうってことかしら♡ とんだ変態
 ね♡ よくそれで人の上に立てたわね♡ 本性知られずに
 いたからできたことかもしれないけど、これでもう台無しだか
 らね♡ あなたたち、性根の腐ったダメな大人の見本として、
 あたしが記録に残してあげる♡ 『ギルガメッシュ王とオジ
 マンディアス王は、人前で全裸になり、立ったまま幼女に陰茎
 を舐められ、その感じようを子供たちになじられることよって
 すさまじい快感を覚えてしまう筆舌に尽くしがたい変態であ
 る』って……♡ 『彼らは女兒の奉仕によつてあっさり絶頂
 し、惨めで無様なイキつぷりを衆目に曝しながら、恍惚として
 果てました。めでたしめでたし♡』って……♡ ねえ、どう
 するの？♡ ここにいるみんなが証人よ、あなたたちただの
 淫乱だって今まさに認定受けようとしているのよ♡ ね、どう
 するう……？♡ こんなのでイったら、困るわね♡ ね♡」

「やめる……！♡ 止せ、止せ、そこはああああ……っ！
 ♡」

ナーサリーはジャンヌリイにペニスを任せ、踏み台を上ってオジマンディアスの乳首に触れた。ふうっ♡と優しく息を吹きかけてから、細い指で乳輪をくるくるなぞる。

「あら、王様はここが弱いのか？♡ おとこのひとなのにおっぱいが弱いのか？♡ おちんちんだけじゃなくっておっぱいも弱いだなんて、ちよつと情けないんじゃないかしら♡ それとも、小さなおんなのこにおっぱいをいじられるのが好きだったのかしら？♡ こんなところでいってしまったらそれこそ末代までの恥だわね♡ すっごく恥ずかしいところ、大勢に見られちゃうってことなのよね……!!♡」

「んおっ！♡ お♡ ほおおおっ！♡ やめっ、やめ……!!♡」

ペろ♡ペろ♡ちゅ♡ちゅっ♡とナーサリーが乳首を舐め唇でしゃぶると、オジマンディアスが顎を反らせて善がる。観衆がピーピー大げさに口笛を吹き、「おっぱい！♡ おっぱい！♡ イーけ！♡ イーけ！♡ オジマンディアスはおっぱいでイーけ！♡」と野太い声で下衆なコールを上げるなか、かぶっ♡と乳首にややく噛みつかれたのが決定打だった。

「ふお……っ！♡」

ぐるりと瞳孔がずれて、白目が剥き出しになる。美しく引き締まった腰がみつともなくがく揺れ、そうして。

「乳首っ乳首いつ！♡ 乳首いやあああああああー
 ー……ー……く……く………っ！♡ そこは駄目
 だっ、それは駄目……、おっぱいは、駄目なのだっ！♡ おっ
 ぱいいじられて駄目だからイクうっ！♡ 幼女におっぱいば
 っくんされて、オジマンディアスは射精しますっ！♡ おっ
 ぱい大好きオジマンディアスのおっぱいだいちゅきバレバレ
 砲っ♡ 幼女に完敗の情けない大人ミルクが今っ！♡ 出
 るっ、出るっ、出るっ、出るううううううううううううう
 ー……ー……ー……っ！♡ おっぱいだいちゅきな
 のく……く……っってどっぴゅん！♡ ちゅちやなおんなの
 こにおっぱいしゃぶられてザーメン出ちゃったあ……っ！
 ♡っってどっぴゅんっ！♡ 子供におっぱい噛みつかれちゃ
 って射精するとこみんなに見られたら興奮しましゅ♡っって暴
 露する変態アラオミルクがあつ、追加でどっぴゅんどっぴゅ
 んどっぴゅんどっぴゅんううううううううううううう
 く……く……ん……ん……ん……ん……っ！♡ 公衆の面前でどっぴ
 ゆんっ！♡ 股間に視線っ、感じてっ、気持ちイイっ！♡
 ああ王様乳首幼女に舐められるの好きなんだあ……♡っって思
 われるの気持ちイイっ！♡ そうですうううっってどっぴゅ
 んっ！♡ スキモノだなあ♡っって思われながら射精実況し
 てイクのイイっ！♡ 感じるっ、感じるう、これまでにない享
 楽をお♡ 感じるぞっ！♡ 視姦されながらイクのがこれ

ほどまでとはあああああ……っ！♡ またいくっ！♡
何回も……っ♡ イってしまおうっ！♡ オジマンディア
スが射精するう！♡ 幼女に乳首を舐められ、みなに射精を
見物されっ、それに興奮して何度も……っ！♡ 変態汁っ、変
態汁を射精するっ！♡ 変態極めたドMアクメ鑑賞会いい
いいいいいい……っ！♡ イイぞっ、イイぞっ、またイク
っ、感じてるって証拠の下変態フェアラオ・オジマンディアス汁
がっ、おちんちんからどっぴゅんびゅううううううううう
うううう……っ！♡ 見られてるのに
……っ！♡ 射精ちんちん曝してびゅっびゅ
う……っ！♡ ううううううう
うううう……っ！♡ あ、あ、見られておる……っ！♡ 余
の、オジマンディアスのおっぱい дай дай ちゅき射精……っ！♡
幼女のちっちゃなおクチに降参しちゃったフェアラオのおっぱ
いなめなめありがと汁があああああああああ……っ
っ♡ 太陽王たる余の、乳首でイカされ射精があっ♡ 今ま
さにつ、観衆どもの慰みもの……っ！♡

「た、太陽の……っ！♡ 霊基がブレ始めておるっ、しつかり
せんか！♡ しつかり……、ほおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおっ！♡

「油断大敵だよー♡」

ジャックがギルガメッシュの陰囊をばくん♡と銜える。そ
して絶妙な強さで、片方の玉に吸いついた。

「あっあ、タマタマいやだあああああああああああ
……っ！♡ かたっぽのタマ
マおクチに啜えてぢゅぢゅぢゅ……っ！♡ 吸われ
ちゃったらああああああああああ……っ！♡ 絶
頂不可避っ！♡ ひとの心配してたのにつ、まさかの自分が
無様アクメっ、ひあああああああああああああ
ああ……っ！♡ ひいつ、ひいつ、ひいつ♡ 出ちゃったあ、賢い
……っ！♡ ひいつ、ひいつ、ひいつ♡ 出ちゃったあ、賢い
王様になったはずなのに、人前で、幼女にタマ舐めされて負
けちゃったびゅっびゅが……っ♡ 出ちゃったよおおお
おおおおおおおおっ！♡ おちんちん見られてるっ、射精
おちんちん見られてるしっ、幼女にタマタマはみはみされてイ
ってる情けないところも全部っ、見られてるの……っ！♡
い……っ！♡ おちんちんっ、ダメだ出るう！♡ 股間見ら
れていくううううううう！♡ 気持ちよくって腰がヘコヘコ揺れ
てるのと見られながらいくう……っ！♡ ギルガメッシュの、
腰へコお！♡ 幼女にタマ銜えられながらの腰ピクピクう！
♡ 見てえ、見て……っ！♡ アーチャーの我も見ていると

「くう……っ♡ ひんっ♡ ひい!♡」

「見ろよあのアホ面!♡」だとか、「ばつちり同時イキ撮れたぜー!♡」だとか、嘲り笑う声にすら震えが走る。なすすべもなく絶頂し続けるふたりの王の姿は、一切の容赦もなく、あらゆる角度から電子媒体へ記録されていた。

「……はあ、はあ、はあ……っ♡」

やがて、どちらともつかずに甘い息を零して、へなへなと床にへたり込む。令呪から解放されたようだが、だからといってすぐに動けるわけでもなかった。そして快感に身をわななかせている間にも、地獄のようなフレーズが彼らの耳に飛び込んでくる。

「ふえらちお対決はギルガメッシュの勝ちー! じゃあ次ねく?♡」

「なん……っ?!♡」

「おい……?!♡ いい加減にせぬか!♡」

視界の端で、真紅の閃光がきらめく。見えない糸で操られるように、ギルガメッシュとオジマンディアスは揃って同じ姿勢をとっていた。

「~~~~~っ!♡」

「なんのつもりだ貴様らああ……っ!♡」

ふたりは立位で観衆に尻を向け、身体をふたつに折り畳む。軽く開いた足の間からは、逆さになった表情が窺えた。引き締まった小尻と、羞恥にしかめられた美しい顔に向け、場内からはどつと笑いの渦が起こる。

「次はねえ、お・ま・ん・こっ♪ おまんこの耐久力勝負なんだよおく……?♡」

「な……っ?!♡」

「……っ!♡ 馬鹿にするのも大概にしろ!♡ 余に、この余にそんなものはない……っ!♡」

聖杯による知識のアップデートで、ジャックの言葉が女性器を指しているということはふたりにも理解できていた。したがって当然の反論をしているはずなのだが、幼女たちはクスクス笑うばかりでちっともこたえている様子がない。

「おにいさんたち、大人なのになあんにも知らないんだねえ……?♡ まあその方が、おかあさんも喜ぶかなあ♡」

「無垢な大人を墮落させるおんなのこって構図、マスターの大

好物だものね♡」

ナーサリーがそう言うなりまた二手に分かれ、子供たちはそれぞれ、肌の色の異なる突き出された尻へと群がっていく。臀部を挟んでペアになり、左右から小ぶりの尻肉に手をかけると、くばあ……♡とはっきり割り開いた。

「美人な王様ベアの、モロ出しおまんこ♡ はぁーい、御開帳♡ みんなっ、撮影タイムだよ！♡ キャスターギルガメッシュの、恥ずかしいところっ♡ おまんこの穴が丸見えでーす♡」

「褐色肌の人って、こんな色のおまんこしてるのねー！♡ てつきり黒っぽいのかなーって思ったら、薄ピンクでかーわいい♡ 全然毛は生えてないのね！♡ ここもお手入れしているの？♡ お付きの女官に刺してもらったりするのかしら！♡ 上品ね、お上品なおまんこのね！♡」

割れんばかりの、男たちの笑い声。静止画を撮るシャッター音や、動画の撮影開始を知らせる電子音。そしてなにより尻たぶを思い切りおっぴろげている小さな手の感触が、獲物となつたふたりの身体をわなわなと震わせた。

「~~~~~……っ 貴様ら！♡ 子供だと思っていたが、もはや手加減などするものか！♡ 殺す！♡ あのいかれた男もろとも宝具で塵にしてくれる！♡」

「太陽王たる余をよくも虚仮に……！♡ 万死に値する！

♡ 冥府の果てで永久に詫びよ！♡ 許しはせんぞ！♡」

「おにいさんたち、口ばっかり♡ やれるもんなら、やってみなよー♡」

「そうよ、現実をご覧になったら？♡ あなたたちは、あたしたちみたいな小さな女の子にいいようにされて、素っ裸で舞台に立つて、おまんこを皆さんにお披露目されちゃってるのよ？♡ あなたたちのおまんこはね、ここにいるサーヴァントみーんなに見られちゃってるの♡ 写真や動画にも撮られちゃって、お気の毒ね♡ でもこんなの、ここではみーんな経験してることだから♡ 大人になるってそういうことよ！♡ おまんこのお役目だからね、仕方のないことなのよ♡」

「うるさい……っ！♡ 貴様らと一緒にするなっ！♡ 我は男だ！♡ 男であり、王なのだ！♡ 我に対する不敬は許さん！♡」

「あはっ♡ 物分かり、悪いんだねえ……♡」

噛みついてきたギルガメッシュに対し、ジャックは不敵に口角を持ち上げた。

「いいよ、わたしたちが教えてあげる♡ おにいさんたちのここはねえ……、お・ま・ん・こ♡ えつちなおまんまなんだよお♡ 証拠にほらあ、すっごく感じやすいでしょ……っ♡」

「ひっ！♡」

「ぐう……っ！♡」

小さな窄まりに向け、少女たちが舌を伸ばす。ぺろん♡と舐め上げてから、ちゅ♡ちゅ♡とキスを繰り返した。

「あつ、あ……！！♡ やめる馬鹿者……！！♡」

「そこは腫ではないだろうが……っ！♡」

「なに言ってるの？♡ おちんちん勃ってきてるじゃない♡♡ 感じてるんでしょ？♡」

「あたしたち、そっちには指一本触れてないのにね♡ 王様たちはおまんこ舐められたら、おちんちんが勃起しちゃうのね♡ おとこのひとって感じてるの隠せなくてほーんと可哀相……♡♡ ちよつと可愛がってあげただけでこれじゃあ、この先どうなっちゃうのかしら？♡」

「ん……っ！♡」

「んおお……っ！♡」

愛撫はいっそう激しくなり、こどもたちの舌は固く閉じた肛門を強引にこじ開け始める。ちゅ♡ちゅっ♡ぐちゅっ♡ぐぶ♡べろ♡ぶちゅ♡じゅぬ♡といかがわしい音がエスカレーターしていくと、ギルガメッシュもオジマンディアスも、ふたりして表情が変化していった。頬は染まり、だらしなく唇が開いていく。それでもなおお令呪の効力で、ろくに抵抗もできず、己の足首を手で掴んでただただ責め苦に耐える姿が滑稽だった。

「ほおーら、ね……♡♡ 気持ちいいでしょ？♡♡ 幼女にぺろ

ぺろされてアへっっちゃうなんて、やっぱりおまんこなんだよお♡♡ おにいさんたちのお尻の穴はね、うんちするだけの場所じゃなくて……♡♡ おー・まー・んー・こ……っ♡♡ いやらしいメスのっ、おまんこ穴なんだよー♡♡ 恥ずかしいことたくさんされて、蹂躪されるための場所……♡♡ オス様に絶対服従の、惨めで無力なメスホール♡♡ なんだよお♡♡ そろそろ分かったかなあ？♡♡

「ちっちゃなおんなのこの唾液でうるうるになっちゃった王様おまんこ……♡♡ どっちも可愛らしいわね♡♡ ね、とつても素敵だからもつとみんなに見てもらいましょ？♡♡ いい道具があるの、持ってきてあげるわね♡」

「な……、に、を……♡♡」

「もうよい……！！♡♡ もう止せ、これ以上は……♡♡」

アビゲイルとジャンヌリリイが舞台袖へ駆けていって、なにやらケーブルのついた器具を手に戻ってきた。と同時に、ウン……、と低い動作音がして、ステージの背面に、二枚の巨大なスクリーンが下りてくる。

「これは……！！♡♡」

「……！！♡♡」

「なーんでしょーか♡」

ジャックが器具を受け取り、その先端を手に向けると、スクリーンいっぱい幼い掌が映った。

「これで、ふたりの♡ おまんこをおーつきく拡大して、みんなに見せてあげられるのよ！♡ 王様おまんこのシワシワまでぜーんぶモロ見えの、超接写まんまんちゃん鑑賞会♡ ね、素敵でしょ！♡ 素敵でしょ……っ♡」

「……ッ！♡」

「なんだ……っ!?♡」

ナーサリーが声を弾ませてそう言うなり、またしても、身体が勝手に動きだす。床に四肢をつき、今度は四つん這いになった。姿勢だけでなく方向も変えられて、客席に尻が、スクリーンに顔が向けられている。

「おかあさんが令呪で手伝ってくれたんだね♡ じゃあおにいさんたち、自分のおまんこがどんな風に映るか見てみなよ♡ このおつきな画面いーっばいにね♡ おまんまんがどーん♡って映るからねえ♡ 結構くつきり映るんだよ、特製のカメラだからねえ♡」

「めちやくちやに拡大されたおまんこじーって全員に見られちゃうってすごく恥ずかしいわよねえ♡ こんな経験なかなかできないから、是非是非じっくり愉しんでね♡ おまんこたあつぷり、たくさんの人に見てもらいましょ……♡ 幼女に、おまんこ……♡ 撮影されて、おーつきく映されちゃうの♡ すこいわよね♡ さあみんなも、盛り上げていきましよう！♡」

「ひ、あ……♡」

「まさか、まさか、こんな……っ！♡」

ナーサリーが音頭をとると、景気良く手拍子が始まった。リズムカルな拍手の合間に、「ま・ん・こー！♡ ま・ん・こー！♡ 王様まんこ♡ まんこっこ！♡ ギルガメツシユのま・ん・こー！♡ オジマンディアスのま・ん・こー！♡ おまんこ見せろ♡ まんまん曝せ！♡ ケツまん曝してイっちまえ！♡」などと野蛮なコールが入る。

自分たちの置かれている状況、全裸で幼女に尻穴を撮影されるようになっていて、それを大勢の男たちに囃し立てられている、という尋常でない窮地に耐えるだけでもう精一杯だった。打開の策もなく、哀れな二頭の羊は目の前の、巨大なスクリーンを見上げさせられている。

「……やめ……♡」

「……嫌だ……っ！♡」

「じゃあいくよーっ！♡ 色白金ぴか王様のノーブルおまんこと♡ えっちなチョコ肌王様のフアラオおまんこ♡ サービスの、超拡大撮影だよ！♡ わたしたち、全員幼女のおまんこ撮影隊が、みんなにお披露目しちゃうんだからねー！♡」

震え声の抗議もむなしく、ジャックとナーサリーはカメラの先を、ふたりの王の肛門に向けた。

「~~~~~うあ……!!」

「……………っ!!」

宣言通り、それぞれの肌の色をした、ふたつの尻穴がスクリーンに大写しになる。あんまり近くで撮るものだから、画面ではアナルの窄まりが見切れてしまっていた。

「あれ、失敗失敗♡ 近すぎたかあ♡」

「大きすぎず小さすぎず、綺麗に収めるようにしなきゃね♡
だつて折角の仲良し王様ダブルおまんこなんだもん……っ!
♡」

ちよūdい頃合いを探して、カメラが肛門に近づいたり、離れたたり。特に急ぐ様子もなく楽しそうになされる蛮行は、さらにはふたりの王を追い詰めた。

「よしっ♡ シワシワもぜんぶ、くつきりはつきり!♡
これでばーつちり!♡」

「さあみんなっ♡ おまんこ撮りましょー!♡ 超拡大の
王様まんこ♡ 召喚記念の、大サービスよ!♡」

手を叩き、ゲラゲラと笑い、みな自前のスマホで無防備な尻穴を撮影している。ひつきりなしに鳴るシャッター音に目眩を感じ、ギルガメッシュもオジマンディアスも言葉を失っていた。サーヴァントであるはずなのに、大量の冷たい汗が、妙な感じで頬をつたう。

「はあい!♡ じゃあ今からおまんこくばくばタイムだよ!

♡ おまんこの穴がくつぱ♡くつぱ♡つておくち開いて閉じてするとこ、みんなで愉しもう!♡」

「じゃあ多数決とりまうす!♡ みんなが見たいのはー?
♡ ギルまんこのおまんこくつぱあ?♡ それとも、オジまん……、あはは、元からそんな名前♡ えっちなお名前のオジまんこちゃんのおまんこくばあですか?♡ おつきな声でー、言ってみて!♡」

「ギルまんこだろ!♡」「いやオジまんこだろ♡」「いいから早くおまんこくばあしろー!♡」と、無責任な野次が飛ぶ。

幼女たちはふんふんとそれを聞きながら、やがて小さく頷いた。

「それじゃ、リクエストにお応えしてギルガメッシュのおまんこをくばあします!♡ つかい閉じてえ?♡ せーの
お……♡」

撮影を続けるジャックのもとにアビゲイルがやって来て、ギルガメッシュの尻肉を押し、臀部を閉じる。その後の掛け声は恐ろしいくらいに、会場内の全員でびたりと一致していた。

「ギルガメッシュのく?♡ おまんこ、くつぱあ……っ♡
……あ……あ……あ……あ……っ♡」

「やめろおとおおとおおとおお……っ!!!♡」

悲鳴も掻き消して、やんややんやと喝采が起きる。

アビゲイルが力一杯尻たぶを割ると、唾液で潤った肛門が、

ぴちゃん♡と鳴って横に開いた。

「はい、くっばー♡ くっばー♡ ギルまんこくっばー♡ おまんこくっばー♡ くっばっばー♡ ああああ……」

♡ ギルちゃんのおまんちよくっばー♡ 幼女のおてででまんこくっばー♡ えっちな横伸びまんちよっちよー♡

♡ みんなで爆笑♡ かーわいいねーっ！♡」

決まった節回しなのか、みな大声でからかいだす。巨大なスクリーンには色鮮やかに、ギルガメツシュの肛門の開け閉めが映し出されていた。くば♡ぴちゅ♡ぱく♡ぱく♡くば♡くば♡くば♡

「……ア……、なん、……あ、……っ！♡」

「もう止せ！♡ 許してやれ！♡ かような真似をしてやるな！♡ なにが楽しいのだ、なにが楽しいのだお前たち……！♡」

「あらオジマンディアス王♡ さすが王様だけに、お願いの仕方も傲慢よねえ♡ ……でもこの状況でお友達を心配するなんてあなた、優しいひとなんだわ♡ じゃあいつこだけ、言うこと聞いてくれたら……♡ やめてあげる♡ どう？♡ いかが？♡」

「……疾く申せ！♡」

ナーサリーはこそこそ、と耳打ちをする。褐色の肌にも関わらず、オジマンディアスは青ざめた。愕然とした表情で目の前

の少女を見つめるが、ナーサリーは悠然と笑みをたたえているだけで、意に介す風もない。

「あなたが本当にお友達を助けたいかどうか、じゃない？♡ あたしは正直、どっちでもいいもの♡」

「卑怯者が……！♡」

「いや、だ♡ もうやめ、あ、あ！♡ そんな、……開くなっ！♡ 我を弄ぶでない……っ！♡」

「くくくく黄金の……！♡」

引き続きギルガメツシュの尻はやたらに開閉され、その映像が流れ続けている。オジマンディアスとてそこまでされてはいないが、薄桃色の尻穴が大きく映し出されている。この場でなにをしても事態が好転しないと分かっていた、が、黙って屈することを選ぶには、オジマンディアスは情に厚すぎた。「……分かった！♡ 分かったから、やめてやれ……！♡」

そなたの提案を飲む！♡」

「あらお利口さん♡ みんなー！♡ オジマンディアス王が、みんなに聞いて欲しいことがあるんだって！♡」

「……っ！♡」

賑やかだった野次や指笛が止まり、一瞬で場内が静かになる。

「さあ、どうぞ♡」

促されると、オジマンディアスは四つん這いで肛門を撮影されたまま、おそるおそる口を開いた。

「くく余は、フアラオ・オジマンディアス………♡ そして………、余の………あうっ！♡」

びしゃあんっ！♡と乾いた音が響いて、オジマンディアスが声を乱す。ナーサリー・ライムが突然、彼の尻を力一杯引っぱいたのだ。

「声が小さーい♡ いつも通りの、大きなお声でお願いしたいわ！♡」

「外道が………っ！♡」

片や、こてこてと装飾の多い服を着こなした幼女。片や、公衆の面前で全裸にされた上獣の姿勢をとらされ、彼女にアナルを暴かれている瘦身の男。そうして少女の方が、かつて王と呼ばれた男の尻を好き放題に叩くのだから、ひどく倒錯的な光景だった。

逆転した力関係を唇を噛みつつも、オジマンディアスは、今度よりはつきりと声を上げる。

「……………余は、………余はっ、フアラオ・オジマンディアスであり………！♡ 余っ、余の、不浄の………、不浄の肛門っ！♡ アヌスっ！♡ すなわちお尻の穴は………っ！♡ くくくくくくくくおまんこであるううううううううううううううっ！！♡ 今ここに宣言しようっ、フアラオ・オジマンディアスのこのモロ出しの肛門は………っ！♡ おまんこであるっ！♡ おまんこっ！♡ 確かにっ、紛うことなきお

まんこなのであるっ！♡ 誤解のなきように繰り返すっ！

♡ 太陽王であるフアラオ・オジマンディアスの晒しものの尻穴はっ、おまんこおとおおとおおとおおとおおとおおお………！♡ 疑うっ！♡ まんこっ！♡ おまんこなのであるっ！♡ 疑うならば余の墓に刻むことを許そうっ！♡ フアラオ・オジマンディアスのアヌスはおまんこであった、と………！♡ 故に！♡ 呼びたい者は呼ぶがいいっ！♡ 余を………、オジまんこディアスと！♡ ケツまんこディアスでもっ、おまんこディアスでもよかるうっ、それは余の名なのであるっ！♡ 友を見捨てることを良しとしなかった王の、おまんこ芸………っ！♡ 巨大映写機で拡大再生されていると知りながらの愚行っ、とくと見るがいい！♡ 刮目せよ！♡ これが余の………っ、フアラオ・オジまんこディアスのっ、渾身のおまんこ芸であるっ！♡ くくくくくっお、おまんこっ、ピクピクピクピクうううううううううううう………っ！♡ 幼女の構えるカメラの前でっ！♡ おまんこっ、連続ピクピクピクピクうううううううううう………っ！♡ 自主的に尻肉をくっばあして………っ！♡ 誰にもっ、侍女にも妻にも伽でも見せなかつた肛門を大衆の前で………っ！♡ ピクピクピクピクううううううううううっ！♡ オジまんこディアスのおまんこが無限にピクピクピクピクうううううううううううううううう

なくっちゃ……♡ こんなにいやらしい身体してるんだから、もしかしたらご褒美になっちゃうのかもしいれないけど♡ まあいいでしょう、痴態を鑑賞してくれるお客様もいることだし♡ お尻ペーンペーンしますからね、おまんこディアスちゃん……♡ いい声で鳴きなさいっ、恥知らずなアラオ！♡ 無様で可愛い、ケツまんディアスうう……っ！♡

ナーサリーは小さな手を振り上げて、力強くオジマンディアスの尻を打つ。見た目が子供とはいえず、仮にもサーヴアントだ。褐色の臀部は見る間に、赤く腫れあがってしまった。

「あひっ！♡ あんっ！♡ お尻っ！♡ お尻い！♡ 叩かれ……っ、あん！♡ おんっ！♡ おおんっ！♡ 幼女にっ♡ お尻っ！♡ 叩かれへるうううううううううう……っ！♡ ケツまんこひくつかせながら童女にお尻ペンペンっ！♡ されてるとこ、見られ……っ！♡ おああっ！♡ あうっ♡ イイっ！♡ あひい！♡ ひん……っ！♡ これすごいっ！♡ すごいいいいい……っ！♡」

「やっぱりご褒美になっちゃうのね♡ 浅ましい子♡ いやらしい子……っ！♡ お詫びしなさい！♡ すけべをお詫びしなさいよ、このまんこディアス！♡ メスまんディアスっ！♡ ほら、ほら、ほら！♡ おまんこヒクついているわよ！♡ 感じてるんでしようこの淫売アラオっ！♡」

「はああああっ！♡ ごめんなさい、お詫びしばすううううううう……っ！♡ おまんこディアスイやらしすぎて申し訳ありませんでしたっ！♡ ちっちゃな子にお尻ペンペンされて悦んじやってすみませんでしたあああああああっ♡ んおっお、おっ♡ ほおおんっ！♡ お尻いい！♡ 気持ちイイ……っ！♡」

「あああああああああ……」

もはや、尻を突き出しナーサリーの責めを迎えにくく勢いで喘いでいたオジマンディアスの耳に、知った声色の悲鳴が届く。淫欲にまみれた思考が、一瞬正常な働きを取り戻した。

「……っ!?♡」

見れば、ギルガメッシュの尻から、しつぽのように太いケールが生えている。あのカメラを肛門に挿入されてしまったのだと悟って、琥珀の瞳が愕然と開いた。

「や、約束が違う……!!♡ あやつは、あやつは助けると言っていたではないか……っ！♡」

「あらやだ、おまんこくばあはやめてあげるって言っただけで、解放してあげるなんて言っていないわよ♡ くばくば撮影会は終わりにして、今度は……♡ おまんこの中の撮影会に移ったみたいね♡ まあ可愛らしいピンクのまんこ肉♡ こんなのとつてもいやらしいわ……♡」

オジマンディアスのアナルが大写しになった巨大スクリー

ンの隣には、艶めいて潤った、ギルガメッシュの媚肉が映し出されていた。ひく♡ひくん♡と淫らに蠕動する様子すら、くつきりはつきりと見てとれる。

「貴様アああああ……っ！♡」

「やめっ、ひやめろお！♡ 搔き回すなあ……っ♡ はら、が……！♡ 我の腹の中にこのような……っ！♡」

「……やめてやれ！♡ 頼む……っ！♡ 貴様たち、あんまりではないか！♡」

ギルガメッシュの悲痛な声に、オジマンディアスの顔が歪んだ。この期に及んで相手の情に訴えるしか手段を持たないことに、高潔な王の矜持がぎしぎしときしんでいく。

「あらあ、ひよっとして彼が羨ましいの？♡ そうねえ、あなたのおまんこにも同じようにしてあげてもいいけれど……♡ ああちよほど良かったわ、タイミングばっちりね！♡」

「マッシュ・キリエライト、ただいま戻りました！」

ナーサリーが目をやった先ではマッシュが、出入り口の扉を開け放ち、律儀に帰還を報告している。

そしてすぐに、自身の後方に向かって声をかけた。

「それでは女性サーヴァントのみなさん、会場内へどうぞ！」

ぞろぞろ、という表現がびつたりの大人数で、女性サーヴァ

ントたちが食堂へと入って来る。仰天しながらギルガメッシュがそのさまを見ていると、行列に並ぶひとりの英霊と目が合った。彼女はセイバー、アルトリア・ペンドラゴン。英雄王と因縁の絆で結ばれた、伝説の騎士王である。

「あ……っ！♡」

凜としてじいっと見つめ返してくるアルトリアの視線に、ギルガメッシュは怯む。言葉を交わす間もないうちに、彼の視界へ、紅の閃光が走った。

新たな令呪の発動によって、本人の意思そっちのけで体勢の変更が行われる。

「！♡」

「うあ……！♡」

気高き王がふたりして、観客席に向かって恥部を露にした、屈辱的なガニ股スクワットポーズをとっていた。股はがばつと大きく外側に開き、両手は頭の後ろに、隷属の証明であるかのように、特に意味もなく組まされている。

ギルガメッシュの尻からは、極太の黒いケーブルがぶらりと垂れ下がり、そのまま舞台の床を這っていた。

そんな彼らに向け、何十人も女性サーヴァントの、好奇や侮蔑、嘲笑の視線が注がれている。

「よせ……！♡ 見るなっ、女ども……っ！♡」

「おい……っ、おい、子供！♡ 余になにををする!!♡」

ナーサリーが潤滑ローションを手に塗りつけ、オジマンディアスのアナルを後ろからいじり始める。

「なについて、あなたも入れて欲しかったんでしょ？♡ いくらなんでも多少は準備しなくちゃ、気持ち良くなれないのよ♡」

「入れ……っ!?♡ 待て、誤解だ、余はそんなこと言っではおらぬ!♡ そんなものは望まぬ!♡ やめよ!♡ 今すぐ……っ!♡」

「えーいつ♡」
「んごおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ!?!♡」
にっこりと微笑んだ幼女によって、本来は出口であるべき器官に、硬い異物が挿入された。

ちようど勃起したペニスぐらいの太さをもったその機械は、ゼリーのぬめりをまとい、にゆるにゆると遠慮なく胎内を突き進む。

「あ……が……っ!♡ おオ、おおお……っ♡」
涎を垂らし、唇を尖らせたみつももない表情でオジマンディアスは呻いた。苦しいのに、悔しいのに、身体は未だに、阿呆らしいポーズをとらされたままだ。未知の苦痛に悶える表情すらも、ショーの見世物のように観客へと曝されている。

「よーし、お客さんも揃ったし、ふたりともおまんこのセツテイング完了だね!♡」

「この体勢だと、王様たちのお顔もおちんちんもよく見えるわね!♡ 特におちんちんは見所よ、今半勃ちの仲良しおちんちんが、ビキビキに勃ってバキバキに張り詰めちゃって、惨めにびよっぱー♡って一緒にミルク撒くところ♡ みんなで眺めて、愉しみましようね!♡」

無邪気さこそが、もつとも残酷だった。
いかにも子供らしい音域で、自分たちの無残なこれから鼻先へと突きつけられている。

そうして、もうどうしようもないのだということも、彼らには分かっていた。

「……ッ!♡」
「おのれ……!♡」

分かっただけはいたが、認められるわけもない。嫌だ、と歯を食いしばる様子がどれほど見る者を興奮させるかも知らず、ふたりは唇を引き結ぶ。

「じゃあ今度はー、おまんこ勝負っ!♡ 先にイッチャウへなちよこまんこはどっちかなー?♡ みんなっ、どんどん賭けてこーっ!♡」

「ふぐうううううううううううううううううううううっ!♡」
「おごえええええええええええええええええええ……っ!♡」
ジャックの景気のいい掛け声と同時に、アビゲイルやナーサリー、ジャンヌリイの手によって、ふたりの肛門に突き刺さ

った器具が激しく上下した。

ぐぼ♡♡ぐぼ♡♡ごんっ♡♡ぐちゅ♡♡ぐぼ♡♡ぐっぼ！♡と、愛らしい顔立ちの少女たちにしては抽挿の具合が荒々しい。ギルガメッシュもオジマンディアスもこれにはたまらず、令呪の効力に反して上体をやや仰け反らせた。

ただそれも結果的に股間を突き出しているように見えてしまつて、悲惨な絵面に、よりえげつなさを足すだけだつた。

「んぐっ！♡ やめ、ひやめええっ！♡ ……これは、ウルク
の、王……っつ！♡ おんっ！♡ ひやめろお、突くなあああ
あ……っ！♡」

「……こ、の、オジマンディアスの玉体につ！♡ なん、たる
……おっおっ！♡ おごあっ！♡ よせっ！♡ ほおっ！
♡ おごおおお……っ！♡」

濁った喘ぎに重なつて、「俺はギルまんこに賭ける！♡ あいつはアナルが弱そうな顔してるからな♡」だの、「では、私はオジまんこに賭けよう。あやつ顔こそ真のスキモノ。初めてのおまんこごちゅんにそうそう耐えられるはずもない」だの、あからさまな揶揄が飛び交う。

「~~~~~っ、くそ、好き勝手言いおつて……っ！♡
うぐうっ♡ おごっ♡ ほおっ♡」

「下劣な……っ！♡ あがつ!?♡ やめよ、そこ……っ♡
おおっ！♡ おっほおおおおおおおっ！♡」

とても看過できない罵声が耳には入るのだが、やはり抵抗もできない。それどころか、こんな状況でも強制発情スキルの効果なのか、抑えきれない劣情が湧き上がってきているのをふたりとも感じていた。

幼女によって操られている無骨な形をしたカメラが内壁を擦り穿つた時、また、男女問わずのひどい嘲りを浴びるたびに。絶望するほかにいまだに、陰茎の勃つ角度が深まつていく。恥ずかしいくらいに反り返り、とろとろ♡とろん♡と蜜を零す。あっちこちから、「ほら見る！♡ ギルまんこのやつ、フル勃起だぞ！♡ もうイクね、俺の勝ちだ！♡」とか、「まだまだ、オジまんこも思いつきり勃つてるからな！♡ 褐色ボディに今にもザーメンぶちまけそうじゃないか……！！♡ 派手に頼むぜ、おまんこアラオっ！♡」だとか、品のない野次が上がる。

胎内の悦いところもあらかた把握されてしまったようで、三度に一度はそこを一杯突かれるようになってしまった。相変わらず馬鹿馬鹿しいスクワットポーズをキープしたまま、ふたりの王は視界にチカチカと瞬く星を見る。過剰な刺激にバグを起こした脳味噌が、理性の柵を薙ぎ払つていつてしまう。

「おっ！♡ おっ！♡ おっ！♡ いやあああっ！♡ 笑
われてるっ！♡ おまんこ幼女におもちやにされてっ！♡
ずんずん突かれて喘いでるとこっ、馬鹿にされてるううっ！

♡ いやだつ！♡ こんなの……っ！♡ おおおつ！♡
おんっ！♡

「余の身体っ、余のおまんこは……、余の……っ！♡ 余のものなのにつ！♡ 好き勝手されてるっ！♡ 童女に痴態弄ばれてるっ！♡ 大勢に虚仮にされてっ、余は、余は……っ！♡ おほお♡ んほおおっ♡ あっへええええええ……っ！♡」

あんまり乱暴にピストンするものだから、腹側へ反り返った二本のペニスが、ぶるんっ♡ぶるんっ♡ぶるるんっ！♡と幾度も揺れる。グラグラ笑う客席の声を聞きながら、ジャックとナーサリーははしゃいで言った。

「そろそろイク？♡ イくんだよね、賢い王様！♡ おちんちんぎつちぎちになって、ふるふる振っちゃうのやーらしい♡」
「こっちもよね、おまんこディアス王！♡ 褐色肌にミルク色のメスザーメン撒きましょ♡ エキゾチックで、やーらしいわ♡」

「おぐ、うぐうっ！♡」
「ふぐあ！♡ ひいつ、ひん……っ！♡」

もう反論の言葉もない。爆発しそうな陰茎をどうにかしようとするものの、どちらもまったくすすべを持たなかった。たたえる色に違いはあれど、ふたりの王のその瞳には、同じよう

に涙が溜まっている。

「あははー、涙目♡ カワイソーで、かわいーね！♡ ほらほらそろそろ、フィニッシュフィニッシュ♡」

「大の男が、それも王様が、幼女におまんこ責められて泣きながら人前で射精なんて倒錯的……っ♡ いいわ、いいわ！♡ 無様で淫らなステージで、なにもかも全部曝け出して……っ！♡」

「おごっ！♡ ほおん！♡ も、やめろお！♡ 無理！♡ 無理！♡ おおっ♡ 無理、ら……っ！♡ あんっ！♡ ああんっ！♡」

「ひぎいいいいっ！♡ おまんこっ！♡ おまんこっ！♡ 余の、おまんこが壊れるううううう……っ！♡ や、めっ！♡ あがっ！♡ ぐうううう……っ！♡ ぐぼっ！♡ ぬぼっ！♡ ちゅぼ！♡ ずごっ！♡ ぐぼん！♡ ぐぼっ！♡と容赦なく貫かれ、限界まで悦を駆け上る。あとほんの少して一線を踏み越えてしまっ、というところでぐぼんっ！♡と強く強く異物を打ち込まれ、美しい喉元を曝して男たちは仰け反った。ぱっと汗が周囲に散り、照明をきらきら放射する。

「さあ仕上げは……♡ マゾイキしよつかあ♡」

「見られて撮られて笑われて、嬉しくって自動イキ♡ どころも触られてないのに、視線と罵声だけでメスアクメ……♡

もうあなたたちなら、できるはずよ……?♡」

「ひ……っ♡」

「な……!♡」

物理的な攻勢が止めば、解放された僅かな余白に羞恥心が蘇る。ジャックとナーサリーはそれぞれカメラをパートナーに任せる、踏み台を上って王たちの耳元に唇を寄せた。

「ほーら王様♡ おちんちん♡ 可愛いね……♡ 人前で

こんな♡ おまんこざこざされて、パッキバキになっちゃつてる……っ♡ それにそのバカ丸出しの変態スクワットポーズ♡ こんなの見られちゃったらもうおしまいだね……♡

ほら、男のサーヴァントだけじゃなくって、女の人も見てるんだよ♡ 女の人たちはちゃあんと服を着てるのに、おにいさんたちはとっても惨めなすっぱんぼん♡ それにおちんちんがガン・勃・ち♡ ガン勃ちおちんちん女の人にじーっで見られちゃってるんだよ?♡ 恥ずかしいの?♡ 恥ずかしいわけじゃないよね……♡ だって見てるこっちが笑っちゃうくらいなっさけないんだもん♡ 英雄王?♡ なのかなあ?♡ メスおまんこ王ギルガメッシュに呼び名変えたらどうかなあ♡ ほら、ほら♡ おまんこのお肉ぐにゅぐにゅなってる……♡ スクリーンに映ってるんだから、もう隠しようがないんだよ♡ おまんこ王の、ギルガメッシュユ……♡ 感じてるんでしょ♡ そうやって呼ばれて感

じてるんでしょっ!♡ へーんたい♡ へーんたい♡ ドすけべ♡ バーカバーカバーカ♡ バカにされて感じちゃうバカまんこ♡ おバーカまんこ……っ♡ バカまんこ♡ ギルガメッシュはバカまんこ♡ おーバー・カー・まーん♡ こ……っ!♡ おバカちゃん♡ まんまんちゃん♡ うふふふふふっ、おちんちんすっごいビクビクしてるうっ!♡」

「オジまんちゃん♡ オジまんこディアスちゃん……♡ みんながあなたの素敵なちんちん見てるわよ♡ すっごいガニ股でどうぞどうぞっ突き出しちゃってるあなたのえっちなおちんちん……♡ 無様よね♡ これがフラオかよ♡ つてみんなあざ笑ってるわよ♡ 奥さんも、たくさん子供もいたんですってね、確かに大きくて立派なおちんちんだもの……♡ でも今は♡ ただのお飾り♡ 役立たず♡ 射精ショーで見世物になるだけの、鑑賞用のおちんちん♡ おまんこディアスちゃんはメスだものね♡ 種付けされる立場であって、する方ではないものね♡ アクメさせられて、アクメ見られて、指差されて笑われる方の性別だものね!♡ ほーらみんな見ってるっ♡ あなたのみつともないとこみんなで見てるっ♡ ね、聞こえるでしょ、みんながあなたの名前を呼んでると……♡ 『オージまんこディアス!♡ おーまんこディアス!♡ 勃起ちんこディアス!♡

「はい、ギルちゃんのアクメおまんこ、くっぱーあ……♡」
 「オジまんこちゃんのアクメおまんこも、ぐっぱああああー
 ー……♡」

「!?♡」

「ひあ……!?♡」

直接肛門に両手の指を入れ、ぼっかりと開いてみせたのだった。左右の人差し指と親指を使って、まあるく、大きく、ぐばあ……♡と尻穴をこじ開ける。

カメラを携えたアビゲイルとジャンヌリリイがすかさず近寄り、ぼかりと開いた淫口を、そして露出させられてしまった内側の媚肉を、巨大スクリーンへと映し出した。

「みんなでごちゆうもーく!♡ これがっ、リアルタイムでアクメしてる、メスまんこ玉ギルガメッシュのおまんこ肉のピクピクだよーお!♡」

「オジまんこディアスちゃんのオジまんこ肉も見てあげてえ♡ 褐色肌でも、おまんこの中はキュートなピンク色なのねっ♡ ちょっと薄い色のラブリーおまんこ穴と一緒にヒクっいてえ……、ピクピク♡ ピクピクっ♡ アクメしてまーす♡ っってアピールしちゃってピクピクピクううう!♡」

「ひあ……♡」

「あ、あ……♡」

思わず振り向いてみれば、彼女たちの言う通りだった。存在

感のあるサイズの映写幕には、ぼかあ……♡と口を開けたアナルと、その中の蠢く淫肉が色鮮やかに再現されている。ぴゅ♡ぴゅ♡と惰性で射精が続くのに連動して、肉筒はきゅん♡きゅん♡きゅん♡と浅ましく収縮していた。

「いいぞー!♡ もつと見せろ!♡ お前らの高飛車まんこの中のメス肉、もつともつとよく見せてみろ!♡ 偉大な王とやらのいやらしい穴っ、隅々までこの場の全員に見られちまええええ……っ!♡」と煽る台詞が鼓膜を揺らせば、どきん!♡と胸が高鳴る。どく♡どく♡どく♡どく♡と鼓動は早まり、脈打つ音が脳内を占拠し。頭が熱くなって、もうなにも考えられなくなっていた。見計らったように、幼女たちが臀部から手を離す。するとふたりは同時に手を伸ばし、今度は自らアナルを広げ、カメラへと見せつけた。

「あっあっあっあっおまんこ見られて撮られてりゅうううううううううううう……っ!♡ 射精してるギルのギルまんこっ!♡ みんなにっ、アルトリアにも見られ……っ!♡ んっんっ!♡ おまんちょ♡ おまんちょ悦くってもつともつとピクっいてしまううううううう……っ!♡」
 「オジまんこっ!♡ オジまんこすごいぞっ!♡ 開いて、映されたらああああ……っ!♡ 感じるっ!♡ ケツまんこ見られて感じるっ!♡ アクメ中のケツまんこ見られたら未知の法悦がっ、さらにおまんこあっちくくしてオジまん

このおまんまんホールがあちあちあつちくつてきぼちひいいいいいいい……っ！♡」

令呪の効果は明らかに切れていたのに、どちらもガニ股を続けたまま肛門をおつびろげ、わざわざカメラに尻を向けている。スクリーンには長く美しい指を尻穴に突っ込み、出来るだけそこを大きく拡げて中を見せようとする必死な両者の姿がしっかりと映っていた。

「あはっ♡ ついにそんなこと自分でやつちゃうんだ！♡ おまんこ苛められてそんなに気持ち良かったんだ？♡ 王様のくせに、辱められたかったんだね！♡ いいよいいよ、こんなにみっともない真似もそうないから！♡ 今までいろんなサーヴアントがいたけど、おにいさんたちがいっちばんメスいよ♡ あっという間に脳味噌おピンクになっちゃって、おバカ丸出しおまんこ頭だね♡ いいよ、いいよお♡ きつとおかあさんも大喜びだから、あなたたちのおまんこっぷり、もつともつと見せつけてあげて！♡」

「さっすがおまんこディアスちゃん♡ オジまんこ呼ばわりでもぜんぜん違和感のない子なのね！♡ 褐色肌だし服の趣味も露出すごいし、この子がえっちじゃないわけがないってあたしとつくに分かってたんだ♡ 自分でおまんこ♡ フルオープンしてカメラにどうぞって♡ すごい淫乱っ♡ そんなにおまんこ見られたいんだあ♡ じゃあはつきり言い

なさいよお！♡ オジまんこディアスは、オジまんこ見られたくつておまんこほじほじぐつばあディアスちゃんでしたあー♡ つて自分でちやあんとお客様にお伝えしなさいよお！♡」

「あひい♡」

「んふう……っ♡」

罵倒の羅列さえ、快感を刺激する材料にしかない。

ふたりはぐるんと白目を剥き、いっそう臀部をカメラに寄せ、懸命に尻穴を開閉してみせた。

「あ……っ！♡ あ、イク、イクううううう……っ！♡ この英雄王がつ、ケツまんこ自分で拡げて……っ♡ おまんこのナカつ、男にも女にも子供にも……！♡ 見られまくりながらアクメっ！♡ アクメっ！♡ アクメすりゆうううううううつ、アクメまんこのヒクつき見られながらアグメえええええええええっ！♡ イイツ、イイツ！♡ もつと見てっ、もつとつ、ギルガメッシュのおまんこのお肉つ、いやらしいとこ見て欲しいからいっばいっばいっ、おまんこ拡げるっ！♡ おまんこつ、おまんこ拡げてる……っ！♡ ギルガメッシュのっ、まんまんっ！♡ おまんまん！♡ 画面いっばいのでつかいおまんちよつ！♡ おまんちよつ、見てえっ、ギルのまんちよつちよ……っ！♡ おまんちよ！♡ おめこっ！♡ ギルガメッシュのっ、すけべなピクつきまんこっこおおおお

おおおおお……っ！♡ あっ、あっ、すけべなこと言ったらもうっ♡ ああああああああああ……っ！♡

「くばくばっ！♡ おまんこくばくばっ！♡ 太陽王の阿克メおまんこ、王自らの手でくばくばくばくばああああああっ！♡

♡ カメラに向かってくばくばくば……っ！♡ イイ……っ！♡ 余のおまんこがっ、みなに見られて……っ！♡ 大

写しで辱められてっ、尻穴もっ、肉筒の蠢きも笑いながら視姦されて……っ♡ 余っ、余はっ、みなに、視線でっ♡ おっ

ひろげまんこ犯されてるうううう……っ！♡ チョコ肌に見えるいやらしいおまんこにっ♡ みな視線っ♡ 感じる

うっ！♡ 余のおまんこを隅々まで視姦してやろうというその下衆な欲望……っ♡ 赦すっ！♡ 赦すぞおっ！♡

至高の王たる余の阿克メおまんこっ！♡ アクメおまんこおっ！♡ しかもその目に刻みつけるがいいっ♡ 見るお

おおっ！♡ おまんこを見よっ！♡ オジまんこディアスのフルオープンくばくばくばああ阿克メおまんこっ！♡ お

まんこディアスたる余の絶頂ぶり……っ♡ おおおっ、んおおっ、おほおおおおおおおおおおおおおお……っ！

仲良く揃って遂情し、カメラの方向へ尻穴を上げた中腰の姿勢で、ぶびゆるるっ♡どどどどどどっ♡びゆるるるるるっ！

♡と高く高く白濁を放っ。

幼女たちの協力により、果てるさなかの媚肉の動きは、少しも残さずに画面に映し出されていた。ギルガメッシュの内壁は

緻細に蠕動し、オジマンディアスの桃肉は派手にびくびくと痙攣する。しかし結局どちらも被虐の悦びを観衆に示しているのだから、場はどつと盛り上がった。

「さすがおまんこ王ギルガメッシュ！♡ おまんこ王の名に恥じないイキっぷり♡ この際だからもつと恥曝そうぜ！

おまんこ見られてどつても気持ちいいでちゅう♡っって叫んでイッてみな！♡

「オジまんこちゃん！♡ ショコラ肌に映えるピンクのおまんこめちやくちやびつくびくしてんの超エロ可愛いよ！♡

もつとえつちなどこ見せてよ！♡ オジまんこディアちゅの発情アラオまんまんていっばいオナニーしてくだしい♡

っって言ってみて♡！

客席のあちこちから無責任なリクエストが飛んでくるが、どういうわけだか無視できない。それどころかふたりは、過剰なまでにその声に応えてみせた。

までにその声に応えてみせた。

ミサンプルは以上です！

読んで頂いて有難うございました！

←以下 R・18 シーン抜粋

◆イシュタル&ニトクリス×ギルガメッシュ&オジマンディアス

ニトクリスがしなやかな動作でおとがいに手を添え顔の向きを固定したので、オジマンディアスは正面から、迸る黄金の水による洗礼を受けることとなった。

「はああーい、大成功♡ 数少ないご友人に、おしっこぶっかけちゃった心境はいかが？♡ ギルガメッシュ♡！」

「あああああああ止まんな……っ！♡ 全然っ、止まらない……っ！♡ ひぐ、すまぬ、太陽の……っ！♡」

ギルガメッシュの腰はかくかく♡かくかく♡と小刻みに震え、もう立つのもやっとの状態だ。イシュタルは彼の体重を支え、ついでに激しく放尿を続ける陰茎を手にとった。ぴと♡と先端をオジマンディアスの額に当てると、だばだばだばだば……♡と滝のように小水が流れていく。

「ふふふ、お顔綺麗にしまちようね♡ 瞼閉じるとほんとに睫毛長っ！♡ 羨ましいわ♡」

「そうなのです、フアラオ・オジマンディアスは気高い魂だけでなくお顔立ちまで美しい……♡ 頭からおしっこを浴びて

いても♡ こんなに、こんなに美しいのです……♡ ああフアラオ、どうぞご友人の友情しーしーを♡ たっぷりと味わってくださいませ……♡」

オジマンディアスの唇に指をかけると、ニトクリスはそこを割って開かせて舌ペロを無理やり引き出した。あげく逆の手で鼻を摘まむので、オジマンディアスは悶えながら、浴びせられているギルガメッシュの尿を飲み込む。

「にふおくり……！♡ んぽおおおっ♡ んぶおおおおおお……っ♡ おぐ、んぐ……っ♡ んべあ、おああ……っ♡」

「素敵です！♡ まあ、たくさんお飲みになられて……！♡ 私、ドキドキしてしまいます♡ たまりません……っ！♡」

「こういう小奇麗な顔したやつってほんつと苛めたくなるのよね……♡ えいっ！♡ お友達のおちんぼしやぶりなさい、オジまんこディアスちゃん!♡」

「むぐう……っ！♡」

大きく開いた口へ、イシュタルがギルガメッシュのペニスをぶち込む。もちろん排尿は止まっていないので、オジマンディアスの唾内はたちまち友の放った体液で溢れた。

「ひぶううううううう……っ！♡ むうううううううう……っ！♡ うぶ、んぶうううっ！♡」

「あああああああ♡ 愛らしいです、フアラオ・おまんこデ

イアス……っ！♡ おちんぽを銜え込んで、しーしーを直接
 飲まされて、呻いて♡ 貴方の今のお姿、まるで豚さんのよう
 ♡ ぶーぶーって♡ おちんぽ銜えてぶーぶーぶーって♡
 ああ不敬♡ こんなことを言ってしまったてはいけないのに……
 ……♡ 私は悪い女です♡ 欲望に勝てなくて……♡ でも
 こんなにも可愛らしいから♡ 無理ですだめです我慢できま
 せん！♡ ファラオ♡ オジまんこディアスっ！♡ どう
 ぞ豚さんにおなりくださいっ♡ ぶうぶうってほら、下品に
 惨めに可愛らしーく♡ 大きな声でっ、鳴いてみせて……
 っ！♡
 「やだ、アハハ！♡ すごいつ、お似合いっ！♡ ぶーぶ
 ー鳴きなさいよ豚まんこディアス！♡ ほんと似合うわ♡
 かーわいい！♡」
 ニトクリスは人差し指と中指で、オジマンディアスの鼻先を
 押した。見事な豚っ鼻になってしまった彼に女たちは興奮し、
 ギルガメッシュとて己の尿意の処理で手一杯で、「ほおおおお
 おおおおおおおー……♡ おしっ♡ おしっ♡ おしっ
 こいっばい、気持ちいいいいいいいいいいいいいい……♡
 ……♡ おしっ♡ おしっ♡ おしっ♡ しゅんしゅ
 んんん……っ♡ これイイよお……っ♡」などとうわごと
 のように漏らしながら、小便を垂らし続ける。屈辱的な責めの
 集中攻撃によって、オジマンディアスの目尻には涙が滲んでい

た。それでも唾内の陰茎を嚙んだりすることもなく、ひたすら
 に加虐に耐えている。形の良い唇の端から、ぼたぼたと飲みき
 れなかった尿が零れた。

「むぐう、むご……っ♡ んご、ふぶつ♡ ふぎい……♡」
 排泄が終わると、ちゅぼんっ！♡とオジマンディアスの口
 からペニス引き抜かれたが、ニトクリスは彼を解放しなかつ
 た。むしろ客席に向かって豚鼻顔を見せつけ、恍惚とした表情
 で「ぶうぶう♡ ぶうぶう♡ ぶつぶ♡ ぶひー♡ オジ
 まんこディアスでしゅぶぶひー♡ ギルガメッシュのしーしー
 おいしかったでしゅぶぶぶうぶう♡ ぶうぶうぶう♡」と鳴
 きまねを繰り返し、観客たちの写真撮影に応じていく。パシャ
 ンパシャンと無数のフラッシュを浴びて、小便まみれの裸体は
 閃光を反射し続けていた。

◆ヘラクレス&ダレイオス三世×ギルガメッシュ&オジマン
 デイアス

しかしそれで終わるどころか、新たな加虐の扉が開いただけ
 だった。交代で壇上に現れたのはダレイオス三世とヘラクレス
 で、200センチをゆうに超える巨体を揺らして王たちを持ち上
 げる。

ようもない衝撃を逃がそうと無駄にあがいていた。

「はひい……っ♡」

「おお、ん……っ♡」

たぐいまれなる美貌の男たちただけに、その崩れ方も凄まじかった。瞳の焦点はあやふやになり、彼らの顔面は、汗と涙と鼻水と、それから性的な体液の混ざりあったものでぐしよぐしよになっている。ぱっかりとだらしなく開いた口からは舌と涎が垂れ下がり、権力者たる威厳と知性とを輝かせていた姿は見る影もない。あまりの顔面崩壊っぷりに観客たちがどつと笑い声を上げるなか、彼らは延々と雄液を注がれ続けた。「ほおっ♡ ほおおっ♡ んごおお……っ♡ ほおおんっ！♡ おおんっ♡ おお……っ！♡ ほごおおおっ！♡」とふたりぶんの獣のような嬌声が、淫らで惨めな旋律を奏でる。「そろそろいいかしらあ？♡」

そう言つて、イシユタルがニトクリスを連れ再び現れた。彼女たちの手にはそれぞれ黒いケーブル状の機材が握られている。

奥付

「英霊性奴化徹底陵辱
ギルガメッシュ・オジマンディアス編」

【発行日】 2020年08月30日

【発行者】 みたいわ南国

【発行】 南国飯処（み）

【印刷】 株式会社ポプルス

【連絡先】 mitaiwanangoku@gmail.com

【pixiv】 <http://pixiv.me/mitaiwanangoku>

【twitter】 <http://twitter.com/MitaiwaNangoku>

【BOOTH】 <https://kakkomi.booth.pm/>

表紙デザインは、
日向工房さまにお願いをさせていただきました！
有難うございました！

◆ネットオークション、フリマアプリ等での転売はご遠慮ください◆

とあるカルデアに召喚されたキャスター・ギルガメッシュとオジマンディアス。

しかしそこは、聖杯の魔力に侵された淫虐の地獄だった——！

◆この本には以下の内容が含まれています◆

淫語 / 心喘ぎ (受けも攻めも) / 羞恥プレイ / 言葉責め / 催眠 / 無理やり / 強制発情 / 体型・年齢等を性的かつ執拗に揶揄する描写 / 異物挿入 (宝具 / カメラ / マイク / シャボン玉ストロー / 吹き戻し / 笛) / 大小スカトロ / 乱交輪姦 / 近親姦 / フィストフック / 連続潮吹き・メスイキ / 犬プレイ / 尻振り / 身体にラクガキ / 陰茎にリボン / 陰茎振り / ダブルピース / ハメ撮り / 女攻め / スパンキング / 公開射精 / 乳首イキ / まんぐり返し / アナル舐め / くぱあ / まんぱ / セルフ顔射 / 逆アナル / 温泉浣腸 / 豚鼻 / 陰茎でビンタ / 壁尻 / 二輪挿し / 結腸責め / 精液排泄 / 鼻の穴に射精 / 陰茎で書道 / まん拓・もん拓 / お掃除フェラ / 顔面に放屁 / コスプレ (JK / 犬 / エロバニー) / 裸踊り / 剃毛 / 焼きごて

◇カップリングが混在しています◇

- ・モブ主人公 × クー・フーリンプロトタイプ
 - ・モブ主人公 × スカサハニスカディ
 - ・モブ主人公 × アキレウス
 - ・モブ主人公 × イアソン
 - ・モブ主人公 × イシュタル
 - ・モブ主人公 × ニトクリス

-
- ・クー・フーリンプロトタイプ × スカサハニスカディ
 - ・クー・フーリンプロトタイプの父 × クー・フーリンプロトタイプ
 - ・クー・フーリンプロトタイプ × クー・フーリンプロトタイプの母
 - ・モブ複数 × クー・フーリンプロトタイプ
 - ・モブ × 各クラスのクー・フーリン

-
- ・ジャック&ナーサリー&アビゲイル&ジャンスリイ × ギルガメッシュ&オジマンディアス
 - ・イシュタル&ニトクリス × ギルガメッシュ&オジマンディアス
 - ・ギルガメッシュ × オジマンディアス
 - ・オジマンディアス × ギルガメッシュ
 - ・ヘラクレス × ギルガメッシュ
 - ・ダレイオス三世 × オジマンディアス